

針ヶ谷新田遺跡

平成25年5月

宇都宮市教育委員会



2号墳とS104・S105



S104出土土器

序

本遺跡は、宇都宮市の南部の雀宮地区に位置し、トヨタウッドユーホーム株式会社による大規模宅地造成に伴う確認調査を行った結果、弥生時代の集落跡、古墳時代の古墳があることが分かりました。

そこで、トヨタウッドユーホーム株式会社と協議を行った結果、当教育委員会が主体となって発掘調査を行うこととなり、この貴重な古代の人々が生活した跡を記録保存することとなりました。その結果をまとめたものが本報告書であり、各方面におきまして広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査にあたりまして御指導いただきました栃木県教育委員会、栃木県立博物館、並びに本市文化財保護行政に対し特段の御理解と御協力を賜りましたトヨタウッドユーホーム株式会社に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成25年5月31日

宇都宮市教育委員会

教育長 水 越 久 夫

例 言

- 1 本報告書は栃木県宇都宮市針ヶ谷町字新田472-1番地に所在する針ヶ谷新田遺跡に関する発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、トヨタウッドユーホーム株式会社（以下事業主）が施工する商業機能を一体とした大規模な住宅地開発に伴うもので、同社の依頼により宇都宮市教育委員会（以下市教委）を調査主体者とし、事業主が調査費用を負担し、平成24年10月15日～11月15日まで調査を実施した。
- 3 調査対象面積は、約10,000㎡である。
- 4 本遺跡の発掘調査での測量、写真撮影等は赤石澤亮、富川努、石川和弘、君島直人、前原義之、近藤真、今平利幸、齊藤しのぶ、中山真理がこれにあたった。
- 5 遺構・遺物の整理、実測などは、齊藤しのぶ、中山真理、鈴木千佳子、村上啓子の協力を得て、今平利幸がこれにあたった。また、遺物の写真撮影は、今平利幸、齊藤しのぶ、中山真理がこれにあたった。
- 6 本書の執筆は、第1章を近藤真が、第2章・第3章を今平利幸が担当した。
- 7 本遺跡出土の遺物及び図面・写真は、宇都宮市教育委員会で保管している。
- 8 発掘調査の関係者は次のとおりである。

〔調査主体〕

〔指導助言〕

宇都宮市文化財保護審議委員会委員

橋本 澄朗

”

竹澤 謙

栃木県立博物館学芸部長

上野 修一

宇都宮市教育委員会 教育長

水越 久夫

教育次長

手塚 敏男

調査担当

文化課長

赤石澤 亮

文化課長補佐

鈴木 光世

文化財保護係長

富川 努

文化財保護グループ

今平利幸・石川和弘・君島直人・前原義之・近藤真・
江川尚美・降幡敏彦・仲沢草

〔調査補助員〕


上野茂・増渕アサ・大西實・福田倉之助・山木信義・長江永吉・古谷勇・横山進・白瀬幸雄・岩橋敏夫・中山純一・中里裕・小森行男・秋山次男・張ヶ谷浩子・伊藤豊世・落合朝子・上山正・関口浩・廣井一雄・野口久・梁島京子・黒崎忠男・入江タカ子・入江通子・入江ツヤ子・入江文子・入江晴江・新井ミヤ子・菅野繁・住谷昭・高松米子・鈴木智子・篠崎安子

- 9 発掘調査の実施並びに本書の作成にあたっては、栃木県教育委員会の指導を受けるとともに次の諸機関及び諸氏の御指導・御協力を賜った。記して感謝を表したい。（順不同、敬称略）

栃木県立博物館、(公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター、トヨタウッドユーホーム株式会社、渡辺建設株式会社、公益社団法人宇都宮市シルバー人材センター、日向野宏志、齋

藤恒夫、藤原哲、芹澤清八、進藤敏雄、中村享史、森嶋秀一、津野田陽介、田熊清彦、藤田典夫

凡 例

1. 挿図の縮尺は、竪穴住居跡が1/60、古墳が1/200、主体部が1/30とし、遺物は1/3 もしくは1/4で示した。また、遺物実測図番号は遺構平・断面図の番号及び図版の遺物番号と一致する。
2. 断面図基準線は標高であり、平面図の方位は磁北を示す。
3. 遺構実測図の土層説明においては、次の略号を使用した。
ローム粒…LR ロームブロック…LB 今市パミス…IP 七本椀パミス…SP 炭化物…C
4. 遺構においては次の略号を使用した。
竪穴住居跡…SI 古墳…SZ 溝…SD 土坑…SK 不明…SX
5. 挿図中の  は焼土を示す。

目 次

巻頭図版

序・例言・凡例・目次・挿図目次・表目次・図版目次

1 はじめに

- (1) 調査の経過..... 1
- (2) 遺跡の環境..... 4

2 調査概要

- (1) 竪穴住居跡..... 9
- (2) 古墳..... 29
- (3) 土坑..... 36
- (4) 溝状遺構..... 36
- (5) その他の出土遺物..... 37

3 おわりに

- (1) 弥生時代の遺構と遺物について..... 40
- (2) 古墳について..... 45

挿 図 目 次

第1図	トレンチ配置図	2
第2図	周辺遺跡分布図	7
第3図	調査区全体図	10
第4図	SI01平・断面図	11
第5図	SI01出土遺物実測図	12
第6図	SI02平・断面図	14
第7図	SI02出土遺物実測図	14
第8図	SI03平・断面図	15
第9図	SI03出土遺物実測図	16
第10図	SI04平・断面図	18
第11図	SI04出土遺物実測図(1)	19
第12図	SI04出土遺物実測図(2)	20
第13図	SI05平・断面図	22
第14図	SI05出土遺物実測図(1)	23
第15図	SI05出土遺物実測図(2)	24
第16図	SI06平・断面図	26
第17図	SI06出土遺物実測図(1)	27
第18図	SI06出土遺物実測図(2)	28
第19図	1号墳平・断面図	31
第20図	1号墳主体部平・断面図	32
第21図	1号墳主体部断面図	33
第22図	1号墳出土遺物実測図	33
第23図	2号墳平・断面図	34
第24図	2号墳主体部平・断面図	35
第25図	2号墳出土直刀実測図	36
第26図	土坑平・断面図	36
第27図	その他の出土遺物実測図(1)	38
第28図	その他の出土遺物実測図(2)	39
第29図	本村遺跡と殿山遺跡周辺図	44
第30図	針ヶ谷新田古墳群と 針ヶ谷新田遺跡石室集成図	48

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	8
第2表	周辺弥生時代後期遺跡 出土土器属性表	42
第3表	周辺弥生時代後期住居跡 規模比較表	43
第4表	針ヶ谷新田古墳群と針ヶ谷新田遺跡 出土石室比較表	47
第5表	県内の古墳終末期方墳一覧表	47

図 版 目 次

巻頭図版

	2号墳とSI04・SI05 SI04出土土器
PL1	SI01完掘状況(南から) SI01セクション(南から)
PL2	SI02完掘状況(南から) SI03遺物出土状況(南から)
PL3	SI03セクション(南から) SI03遺物出土状況(東から)
PL4	SI03・SI02完掘写真(西から) SI04完掘状況(南から)
PL5	SI04(B区)遺物出土状況(東から) SI04(D区)遺物出土状況(西から)
PL6	SI05完掘状況(南から) SI05・SI04・2号墳完掘写真(西から)
PL7	SI06完掘状況(南から) SI06(D区)遺物出土状況(北から)
PL8	SI06伊周辺遺物出土状況(南から) 1号墳主体部完掘状況(南から)
PL9	1号墳主体部床石確認状況(西から) 1号墳主体部セクション(東から)
PL10	1号墳主体部セクション(東から) 1号墳周溝セクション(東から)
PL11	1号墳周溝セクション(南から) 1号墳全景(西から)

PL12	1号墳全景（南から） 2号墳主体部完掘状況（南から）	PL21	①SI04出土遺物（1）
PL13	2号墳主体部床石確認状況（西から） 2号墳周溝セクション（東から）	PL22	①SI04出土遺物（2）
PL14	2号墳周溝セクション（東から） 2号墳周溝南側遺物出土状況（南から）	PL23	①SI04出土遺物（3）
PL15	2号墳全景（西から） 2号墳全景（南から）	PL24	①SI04出土遺物（4）
PL16	SK01完掘状況（南から） SK02セクション（南から）	PL25	①SI04出土遺物（5） ②SI05出土遺物（1）
PL17	①SI01出土遺物	PL26	①SI05出土遺物（2）
PL18	①SI01紡錘車 ②SI01石鏃 ③SI02出土遺物	PL27	①SI05出土遺物（3）
PL19	①SI03出土遺物（1）	PL28	①SI06出土遺物（1）
PL20	①SI03出土遺物（2）	PL29	①SI06出土遺物（2）
		PL30	①SI06出土石器 ②1号墳出土土器（1） ③1号墳出土土器（2） ④2号墳出土直刀
		PL31	①その他の出土遺物（1）
		PL32	①その他の出土遺物（2）

1 はじめに

(1) 調査の経緯

針ヶ谷新田遺跡(宇都宮市針ヶ谷町)は栃木県埋蔵文化財地図(平成9年 栃木県教育委員会)には未記載であり、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかった。これは当地が昭和26年以降工場の敷地内であったため昭和53～57年度に実施した遺跡の分布調査の際に踏査ができなかったことにある。平成21年2月に工場は閉鎖され、数年間そのままになっていたが、平成24年5月下旬に工場の解体工事が始まり、工場跡地はトヨタウッドユーホーム株式会社によって大規模な宅地造成工事が行われることが新聞報道等で明らかとなった。

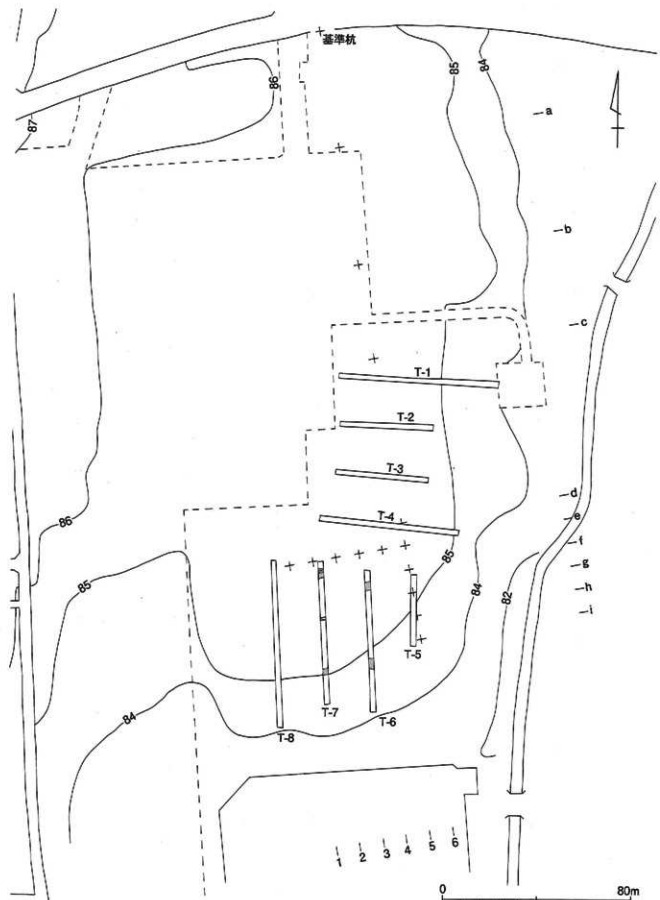
宇都宮市教育委員会は、今回の工事が5haの敷地を有する大規模な造成工事であり且つ当地のすぐ南側に埋蔵文化財包蔵地が隣接することや以前敷地内に古墳があったとの市民からの情報などから、栃木県教育委員会文化財課と協議を行った結果、周知の埋蔵文化財包蔵地ではないものの造成工事着手前に遺跡の有無の調査について事業主に協力依頼を求めることとなった。事業主と市文化課とで協議した結果、確認調査を実施し、遺構が確認された場合は造成工事着手までに本調査を終了するとの内容で事業主から協力を得られた。

平成24年10月15日から16日にかけて、造成工事により切土される部分に幅2m、長さ30m～70mの試掘溝(トレンチ)を20m間隔で8本入れて確認調査を実施した(第1図)。調査にあたっては、文化課職員以外にも宇都宮市文化財保護審議委員や栃木県教育委員会文化財課、栃木県立博物館立ち会いのもと、遺構の有無を確認した。その結果、古墳2基、堅穴住居跡2軒のほか、二軒屋式土器片数点が確認できた。

この結果を基に再び事業主と協議を行った結果、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。発掘調査に必要な費用については原因者であるトヨタウッドユーホーム株式会社が負担し、調査は宇都宮市教育委員会が担当することとなった。

【調査日誌抄】

- 10月15日 確認調査の開始。トレンチを設定し重機による表土剥ぎ。
- 10月16日 トレンチを設定し重機による表土剥ぎ。遺構出土状況の確認。
- 10月17日 T-1からT-8までのジョレンがけと掘削状況の写真撮影。
- 10月18日 地形測量のための基準杭打設。
- 10月19日 調査区の平面図の作成。トレンチのセクション図作成。
- 10月22日 T-1、T-2のジョレンがけをして精査。30～40cmの造成土層と木の根伐根痕が確認されたが、遺構は見つからなかった。T-1、T-2のセクション図作成。
- 10月24日 T-3、T-4のジョレンがけをして精査。30～40cmの造成土層と木の根伐根痕が確認されたが、遺構は見つからなかった。T-3、T-4のセクション図作成。
- 10月25日 T-5、T-8のジョレンがけをして精査。木の根伐根痕が確認されたが、遺構は見つからなかった。T-5、T-8のセクション図作成。T-1～T-3の埋め戻し。
- 10月26日 遺構の確認された部分を面的に表土剥ぎし、遺構の広がりを確認。1号墳の北西部は大きく攪乱を受けていることが判明。主体部付近も攪乱を受けており、攪乱部分を除去



第1図 トレンチ配置図

- したところ、石室の床面らしき遺構を確認。周溝の一部を掘り下げた。
- 10月29日 遺構の確認された部分を面的に表土剥ぎし、遺構の広がりを確認。ジョレンがけをし、遺構を確認。新たに住居跡を2軒確認。1号墳と2号墳の周溝の一部を掘り下げた。
- 10月31日 重機による表土剥ぎ。ジョレンがけによる遺構の確認。古墳2基と弥生時代の竪穴住居跡4軒を確認。1号墳の周溝の深さを確認するための試掘。1号墳石室床面部分の精査。側壁は確認できず。
- 11月 1日 基準杭の打設。ジョレンがけによる遺構の確認。新たに弥生時代の住居跡が1軒確認された。2号墳の周溝掘り下げ。直刀片が出土。1号墳の石室床面部分の精査及び清掃後写真撮影。
- 11月 2日 全体遺構平面図の作成。ジョレンがけによる遺構の確認。1号墳、2号墳の周溝掘り下げ。
- 11月 5日 全体遺構平面図の作成。ジョレンがけによる遺構の確認。1号墳の周溝の掘り下げと主体部の実測。2号墳周溝と主体部の掘り下げ。
- 11月 7日 全体遺構平面図の作成。ジョレンがけによる遺構の確認。2号墳の周溝掘り下げ。1号墳主体部の実測とセクション図の作成。S I O 1～S I O 4の掘り下げ。
- 11月 8日 2号墳主体部の掘り下げ。床面と側壁の裏込の状態を確認。ほとんど破壊されている状況であった。2号墳主体部セクション図作成及び写真撮影。1号墳主体部のエレベーション図作成。1号墳周溝の壁出し。S I O 1、S I O 3、S I O 5、S I O 6の掘り下げ。S I O 2セクション図作成及び写真撮影。
- 11月 9日 2号墳主体部断ち割り。主体部セクションベルトの除去。1号墳主体部のエレベーション図作成と1層目の床石を除去。1号墳周溝セクション図作成後写真撮影。S I O 1、S I O 3、S I O 5、S I O 6の掘り下げ。S I O 2ベルト除去。中央に炉と4箇所の柱穴を確認。
- 11月10日 1号墳主体部の下層平面図作成。清掃後写真撮影。1号墳周溝セクション図作成後写真撮影。S I O 1、S I O 3、S I O 4、S I O 5、S I O 6の掘り下げ。S I O 2写真撮影後、平面図・柱穴エレベーション図作成。S I O 3ベルト除去。写真撮影後、平面図作成。S I O 1、S I O 5セクション写真撮影。
- 11月12日 1号墳主体部の下層平面図作成。2号墳周溝セクション図作成後写真撮影。2号墳床面精査。S I O 4、S I O 6の掘り下げ。S I O 6写真撮影後、セクション図作成。S I O 1セクション図作成後、ベルト除去。S I O 5セクション図作成後、ベルト除去。S I O 3平面図・エレベーション図作成。
- 11月13日 1号墳ベルト除去。2号墳周溝ベルト除去。2号墳平面図作成。S I O 4、S I O 6の掘り下げ。S I O 1完掘写真撮影。S I O 5平面図作成。S I O 3完掘写真撮影。
- 11月14日 1号墳平面図作成。2号墳周溝清掃。2号墳主体部の平面図作成。S I O 4、S I O 6の掘り下げ後写真撮影をし、セクション図作成。S I O 1平面図・エレベーション図作成。S I O 5完掘写真撮影。
- 11月15日 1号墳清掃後完掘写真撮影。2号墳清掃後完掘写真撮影。S I O 4、S I O 6の清掃後完掘写真撮影。全体写真撮影。調査終了。

(2) 遺跡の環境

針ヶ谷新田遺跡の所在する宇都宮市は、栃木県の中央部に位置し、関東平野の最奥部にあたる。針ヶ谷新田遺跡は宇都宮市街地の南南西へ約7km、上三川町の中心地からは北西へ約8kmに位置する。

針ヶ谷新田遺跡は宝木台地上の標高約84mに立地し、この台地を開析し南流する西川田川と兵庫川に挟まれた小台地上に位置する。これらの二河川の源流は江曾島付近に端を発するが、現在は完全に市街地化されており確認は困難である。これらの二河川は、遺跡より2,400m下流の下野市上古山付近にて合流、さらに2,200m下流の下野市下古山付近にて姿川に合流する。

この小台地の水利はあまり良好ではなく、以前はほとんどが平地林であり、畑地を中心とした土地利用がなされていた。水田も若干認められるが地下水をポンプで揚水して行われているものである。戦後、栃木県総合運動公園や宇都宮環状線の建設に伴い開発が進み、遺跡のほとんどが宅地化の波に襲われ、現在は消滅してしまった遺跡も見られる。

次に本遺跡の周辺約2km圏内の遺跡を中心に、歴史的環境について概略を述べる。

旧石器・縄文時代

本遺跡周辺においては、今のところ目立った旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代の遺跡は数多く確認されている。

鳴神遺跡(46)では、平成15～17年度の調査によって、遺跡の南側を中心に竪穴住居跡16軒、袋状土坑10基が確認されている。また、遺物は多数の縄文土器のほか、石皿、磨石、蜂巣石、打製石器、石鏃、石錘、土錘、首飾りの玉が出土している。これらの遺構・遺物は縄文中期から晩期のものと考えられる。

鳴神遺跡の東に隣接する石川坪遺跡(47)では、平成6・7・11年度の調査によって竪穴住居跡7軒、袋状土坑26基が確認されている。これらの遺構・遺物は縄文中期から晩期のものと考えられる。

また、旭ヶ丘団地北遺跡(8)、旭ヶ丘団地遺跡(9)、若松原遺跡(11)、西原北遺跡(12)、上坪新田遺跡(31)、見明遺跡(37)、赤岩遺跡(38)、鳥の前遺跡(41)、天狗原雀宮中前遺跡(42)、赤土山遺跡(43)、並木遺跡(44)、三ツ矢遺跡(45)、富士見団地北遺跡(49)などは、現在、宅地や畑地になっており、表土上に縄文土器の破片が確認されている。

弥生時代

本遺跡の地区は宇都宮市内としては弥生時代後期の遺跡が多く分布する地域でもあり、二軒屋式土器の標式地である二軒屋遺跡(10)が所在している。本遺跡以外で二軒屋式を含む遺跡に二子塚北遺跡(39)、上坪新田遺跡(31)、上坪遺跡(29)、見明遺跡(37)、鳥の前遺跡(41)、天狗原雀宮中前遺跡(42)等がある。天狗原雀宮中前遺跡では、平成4年度の調査によって、弥生時代の竪穴住居跡が1軒確認されている。また、若松原遺跡(11)、西原北遺跡(12)、赤岩遺跡(38)などからも弥生時代後期の土器片が表採されている。

古墳時代

宝木台地上の本遺跡の地区は、塚山古墳群(4)、牛塚古墳(33)、二子塚古墳(40)、針ヶ谷新田古墳(30)、幕田古墳群(28)などの古墳時代中期～後期にかけての古墳が築造されており、極

めて古墳の密度の高い地区である。

塚山古墳は全長98mの前方後円墳で墳丘は三段に築かれ、後円部と前方部の一部に葺石を持つ。円筒埴輪・朝顔形埴輪・土師器・須恵器が出土している。これに後続して全長63.1mの帆立貝式前方後円墳である塚山西古墳、全長58mの帆立貝式前方後円墳である塚山南古墳が順次築造される。その周辺に小円墳群が築かれている。

塚山古墳群と特に関係が深いと思われる集落は、北若松原遺跡(5)である。北若松原遺跡は、塚山古墳群の東方約400mのところに位置し、古墳群との間には浅い谷が入る。5世紀後半から6世紀前半の竪穴住居跡26件と平安時代の竪穴住居跡2軒、土坑十数基が確認されている。なお、遺物の中には高坏などの古式須恵器が含まれる。

一向寺別院付近遺跡(13)では、平成9年の確認調査によって、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1軒、土坑1基等が確認されている。遺物は、古墳時代後期から平安時代にかけての土師器及び須恵器が少量出土した。

若松原南遺跡(16)では、平成18～19年の調査によって、古墳時代の竪穴住居跡が4軒、掘立柱建物跡が3棟、土坑跡が確認されている。遺物については、古墳時代前期の土師器片が数点確認されている。

十里木古墳(18)と二子塚古墳(40)は、いずれも帆立貝式前方後円墳であると考えられており、十里木古墳では、平成9年度の確認調査で、凝灰岩の切石を使用した横穴式石室が確認されているが、墳丘は削平されており、周溝も確認できなかったため、墳形および規模は不明である。

下原遺跡(24)では、平成4年度の調査によって、竪穴住居跡10軒、土坑3基、井戸跡1基、炭窯跡1基が確認された。古墳時代終末期から奈良時代にかけての竪穴住居跡と考えられる。

幕田古墳群(28)は円墳だけによって構成される古墳群で、現在10基の古墳が確認されている。各墳丘の規模は、直径が10～20m前後、高さが1～1.5m前後である。

針ヶ谷新田古墳群(30)は4基の円墳があったが、昭和58年に小学校建設のために2基の古墳は発掘調査が行われた。いずれも横穴式石室で、遺物は土師器、須恵器、直刀等が出土している。

牛塚古墳(33)は古くから豊富な鏡や馬具の出土で知られていたが、昭和44年の発掘調査で全長56.7mの帆立貝式前方後円墳であることが判明している。5世紀末～6世紀初頭に築造されたと考えられている。

牛塚東遺跡(34)では、平成2年度の調査によって、古墳時代前期の方形周溝墓2基が確認された。出土遺物はパレス壺2点、高坏2点、器台2点、小型壺1点で、いずれも周溝底から20cm～30cm浮いた状態で出土した。

天狗原雀宮中前遺跡(42)では、平成4年度の調査によって、竪穴住居跡13軒、円形周溝遺構1基、土坑7基が確認された。古墳時代前期の住居跡が2軒、それ以外はほとんどが古墳時代後期の住居跡と考えられる。遺物としては、弥生土器片、土師器片がいずれも数点出土した。石川坪遺跡(47)では、平成11年度の調査によって古墳時代の住居跡が2軒確認されている。

上坪遺跡(29)では、古墳時代の土師器・須恵器などが表土上に確認されている。また、溜西遺跡(14)、上坪新田遺跡(31)、赤岩遺跡(38)、鳥の前遺跡(41)、並木遺跡(44)、富士見団地北遺跡(49)では、表土上に土師器の破片が散見できる。

奈良・平安時代

牛塚東遺跡(34)では、平成2年度の調査によって、奈良時代の住居跡が1軒確認された。遺物は土師器、須恵器片及び鉄鎌が出土している。下原遺跡(24)では、平成4年度の調査によって、竪穴住居跡10軒、土坑3基、井戸跡1基、炭窯跡1基が確認された。古墳時代終末期から奈良時代にかけての竪穴住居跡と考えられる。石川坪遺跡(47)では、平成11年度の調査によって、奈良～平安時代の竪穴住居跡6軒確認されている。

また、雀宮東浦遺跡(26)、上坪遺跡(29)、熊野神社南遺跡(35)、見明遺跡(37)では、遺跡の表土上に奈良期と考えられる土師器と須恵器の破片が散見できる。また、雀宮駅東遺跡(27)、上坪新田遺跡(31)、島の前遺跡(41)、並木遺跡(44)、三ツ矢遺跡(45)では、表土上に奈良期と考えられる土師器の破片が散布している。

(参考文献)

- 宇都宮市教育委員会 1983 『宇都宮市埋蔵文化財等遺跡詳細分布確認調査報告書—宇都宮の遺跡—』
宇都宮市教育委員会 1983 宇都宮市埋蔵文化財報告書第11集『針ヶ谷新田古墳群』
宇都宮市教育委員会 1987～2000 『宇都宮市文化財年報 第3号～15号』
宇都宮市教育委員会 1993 宇都宮市埋蔵文化財報告書第32集『牛塚東遺跡』
宇都宮市教育委員会 1993 宇都宮市埋蔵文化財報告書第33集『下原遺跡』
宇都宮市教育委員会 1994 宇都宮市埋蔵文化財報告書第34集『天狗原遺跡』
宇都宮市教育委員会 1996 宇都宮市埋蔵文化財報告書第40集『塚山古墳群』
宇都宮市教育委員会 2005 宇都宮市埋蔵文化財報告書第50集『本村遺跡(中・近世編)』
下野考古学研究会 1996 『下野考古学』24
栃木県教育委員会 1997 『栃木県埋蔵文化財地図』
栃木県史編さん委員会 1976 『栃木県史』資料編 考古1



第2圖 周辺巡跡分布圖 (1 / 25,000)

No.	遺跡名	所在地	時代と種別	概要
1	針ヶ谷新田遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文～古墳	本報告書
2	豊田第一小宮遺跡	宇都宮市西川田町	古墳・歴史	平成3・5・11～12年度調査
3	湯田城遺跡	宇都宮市南町本町3丁目	奈良・平安	集落跡
4	合ノ塚遺跡	宇都宮市藤里町	奈良・平安	集落跡
5	小野遺跡北遺跡	宇都宮市西川田南2丁目	縄文(中期)	集落跡
6	鬼マーケット跡遺跡	宇都宮市西川田南2丁目	縄文(中期)	集落跡
7	極山北遺跡	宇都宮市西川田6丁目	古墳	集落跡
8	極山古墳群	宇都宮市西川田7丁目	古墳	古墳
9	北若松城遺跡	宇都宮市北若松原1丁目	古墳・奈良	集落跡
10	宮の内遺跡	宇都宮市宮の内1丁目	古墳・歴史	集落跡
11	坂原遺跡	宇都宮市藤里町	縄文	集落跡
12	坂原古墳	宇都宮市藤里町	古墳	古墳
13	旭ヶ丘北遺跡	宇都宮市兵部塚1丁目	縄文	集落跡
14	旭ヶ丘南遺跡	宇都宮市兵部塚1丁目	縄文	集落跡
15	二軒河原遺跡	宇都宮市若松原3丁目	弥生・古墳	集落跡
16	若松原遺跡	宇都宮市若松原3丁目	縄文～古墳	集落跡
17	西原北遺跡	宇都宮市若松原3丁目	縄文～古墳	集落跡
18	一内寺前沢付原遺跡	宇都宮市若松原1丁目	古墳	集落跡
19	熊面遺跡	宇都宮市若松原1丁目	古墳	集落跡
20	本田橋新西遺跡	宇都宮市宮の内2丁目	縄文	集落跡
21	堀口城跡	宇都宮市藤里町	室町	城跡
22	堂島古墳	宇都宮市藤里町	奈良・平安	集落跡
23	藤島古墳群(性古墳)	宇都宮市藤里町	古墳	古墳
24	堂島北遺跡	宇都宮市藤里町	弥生・奈良	集落跡
25	兵衛野西原遺跡	宇都宮市長根原町	古墳・奈良	集落跡
26	下梨遺跡	宇都宮市長根原3丁目	弥生・歴史	集落跡
27	若松原南遺跡	宇都宮市長根原3丁目	古墳	集落跡
28	細河西原遺跡	宇都宮市若松原1丁目	古墳・奈良	集落跡
29	十集大古墳	宇都宮市佐野宮2丁目	古墳	古墳
30	熊女塚古墳	宇都宮市佐野宮町	古墳	古墳
31	安塚内原遺跡	壬生町安塚	縄文・古墳～歴史	
32	藤田古墳群	宇都宮市藤里町	古墳	古墳
33	上浮原遺跡	宇都宮市針ヶ谷1丁目	弥生～奈良	集落跡
34	上浮原田遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文～奈良	集落跡
35	針ヶ谷新田古墳群	宇都宮市針ヶ谷1丁目	古墳	古墳
36	大谷田遺跡	宇都宮市五代1丁目	奈良・平安	集落跡
37	道の宮西1丁目遺跡	宇都宮市道の宮4丁目	古墳	集落跡
38	東京東原遺跡	宇都宮市霞宮町	奈良	版倉地
39	霞宮東原遺跡	宇都宮市霞宮町	奈良	集落跡
40	熊野神社南遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	奈良	集落跡
41	立海石遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	古墳・奈良	集落跡
42	見明遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文・弥生・奈良	集落跡
43	藤原遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文・古墳	集落跡
44	二子塚北遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	弥生	集落跡
45	二子塚古墳	宇都宮市針ヶ谷町	古墳	古墳
46	島の浜遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文・古墳・奈良	集落跡
47	天照原(西宮中)遺跡	宇都宮市幸の宮2丁目	縄文～古墳	集落跡
48	赤土山遺跡	宇都宮市所野町	縄文・奈良	集落跡
49	牛原古墳	宇都宮市所野町	古墳	古墳
50	牛原東遺跡	宇都宮市所野町	奈良	集落跡
51	宇都宮佛壇南遺跡	宇都宮市所野町	古墳	集落跡
52	安塚南原遺跡	壬生町安塚	古墳～歴史	
53	十集大古墳	壬生町安塚	古墳	古墳
54	神ノ前遺跡	下野市上高山	古墳～平安	版倉地
55	西敷遺跡	下野市上高山	古墳～平安	版倉地
56	北木遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文・奈良	集落跡
57	三ツ矢遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文・奈良	集落跡
58	御所遺跡	下野市上高山	縄文・古墳～平安	版倉地
59	鴨神遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文・奈良	集落跡
60	石山坪遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	縄文・奈良	集落跡
61	岡田山遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	古墳～平安	集落跡
62	富士山原北遺跡	宇都宮市富士見町	縄文・古墳	集落跡
63	多功神社古墳群	宇都宮市茂原町	古墳	古墳
64	茂原北原遺跡	宇都宮市茂原町	奈良	集落跡
65	南原C遺跡	壬生町安塚	古墳～歴史	
66	南五塚船A遺跡	壬生町安塚	古墳	
67	南五塚船B遺跡	壬生町安塚	古墳	
68	安塚内原古墳群	壬生町安塚	古墳	古墳
69	集賢古墳	下野市上高山	古墳	古墳
70	神ノ内遺跡	下野市上高山	縄文・古墳	版倉地
71	湯野神社古墳	下野市上高山	古墳	古墳
72	長敷遺跡	下野市上高山	古墳～平安	版倉地
73	富士見原山遺跡	宇都宮市富士見町	古墳・奈良	集落跡
74	内ノ内遺跡	下野市上高山	縄文～平安	版倉地
75	上原遺跡	下野市上高山	縄文・古墳～平安	版倉地
76	前ノ内遺跡	宇都宮市茂原町	奈良	集落跡

第1表 周辺遺跡一覧表

2 調査概要

調査区内は、以前の造成工事によりほぼ平坦になっていた。そのため、造成土20～30cmを取り除くとローム地山やその上の漸移層となり、黒色土はあまり残っていなかった。また、全面的に木の抜根等の擾乱層が見られた。確認された遺構は、竪穴住居跡6軒、古墳2基、土坑2基、溝1条である。遺構は南傾斜面上に位置し、古墳2基が南北に並び、弥生時代の竪穴住居跡6軒が点在した(第3図)。以下、その結果について記す。

(1) 竪穴住居跡

SI01 (第4・5図)

位置 調査区南東部に位置する。平面形 南北5.56m×東西4.4mの隅丸長方形。方位 N・1°・E
床面 ローム地山。壁 確認面から深さ30～35cm。柱穴 対角線上に4本の柱穴を確認。そのうちのP2とP3は長軸30～40cm、幅15～20cmの楕円形状のもので、円形の柱材とは違ったものを立てていた可能性がある。炉 ほぼ中央に地床炉が1基確認された。中央の床面は良く焼けている。覆土状況 自然堆積。

遺物

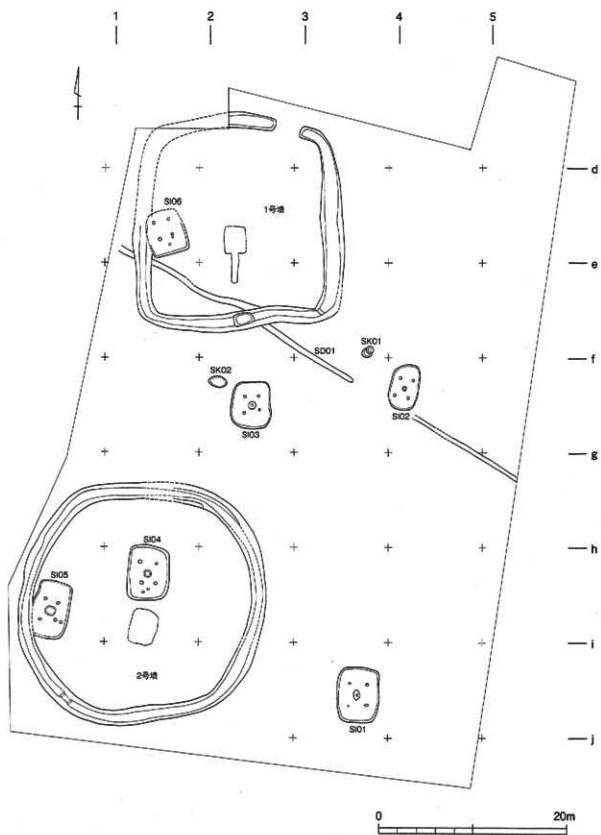
1～8は、口縁部片である。1～3・7は複合口縁で、附加条1種の縄文が施され、縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。色調は1と2が暗褐色で一部に煤が付着し、3が赤褐色。7は暗赤褐色で胎土に石英、長石をやや多く含む。4は附加条2種の縄文が施され、口唇部にへら状工具による刻みがある。色調は暗褐色。5は捻糸文が施され、口唇部にへら状工具による刻みがある。色調は黒褐色。6は複合口縁で、棒状工具により口唇部が押捺、口縁部下端が刺突されている。色調は暗褐色。8は複合口縁で、口縁部は無文、頸部は赤彩後へら描きが施される。胎土もほかの土器と違い異系統の土器と思われる。

9～15は頸部片である。9は櫛描きによる波状文と籬状文が施され、色調が暗赤褐色。10と11は櫛描きによる波状文が施され、色調は10が淡褐色、11が暗褐色。12は櫛描きによる連弧文と波状文が施され、色調が淡褐色。13は櫛描きによる波状文が施され、円形付文が貼り付けられている。色調は淡褐色で、胎土に角閃石をやや多く含む。14は破片のため詳細がわからないがへら描文で胴部上半に附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色。15は櫛描きによる重山形文が施される。色調は橙褐色。

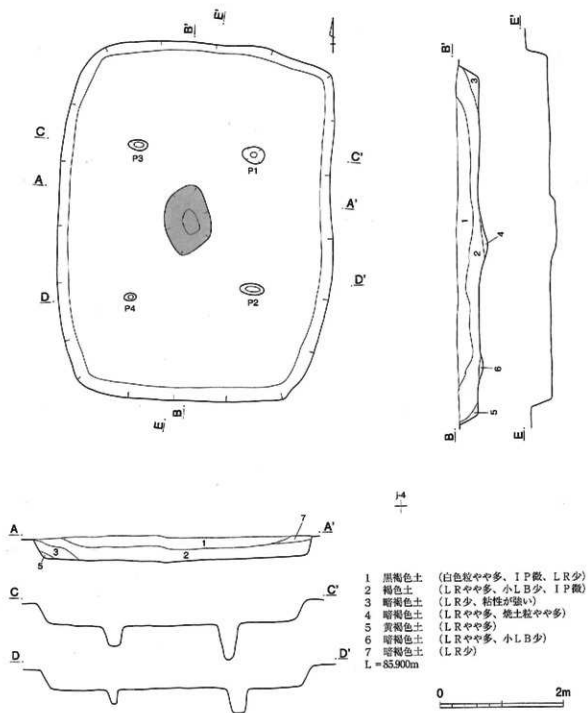
16～25は胴部片である。17～19は附加条1種の縄文が施され、色調は暗褐色で、16・17・19は外面に煤が付着し、18は内面が焦げ付いている。20は単節の斜縄文で、色調は淡褐色。21～25は附加条1種と思われるが、軸繩の条にそって巻かれていない。21と22は赤褐色で同一個体の可能性がある。色調は23が淡褐色、24が暗褐色。25が淡褐色で、胎土に角閃石を多く含む。

26・27は底部片である。26は底径が推定6cmで、木葉痕が残る。色調は淡褐色。27は布目痕が残る。色調は淡褐色。

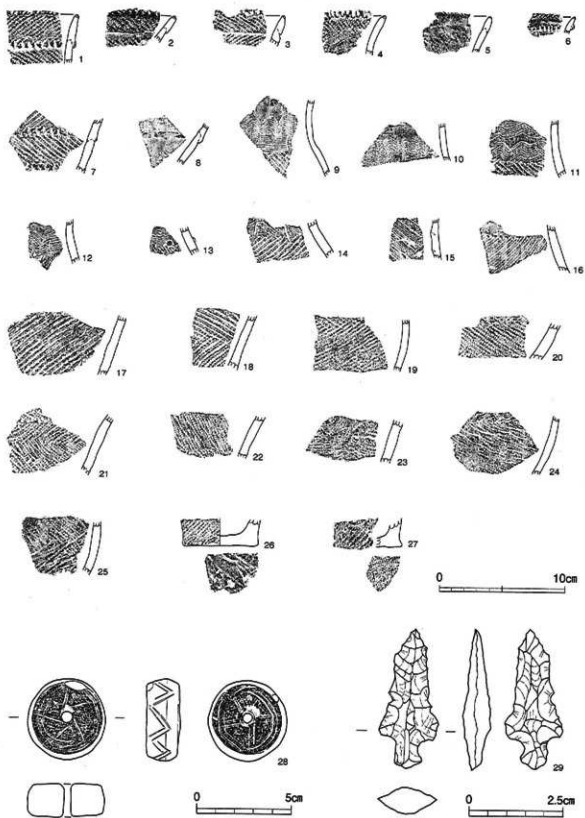
このほかに、紡錘車1点と石籬1点が出土している。紡錘車は土製で、直径が3.8cm、厚さが1.8cmで、両面に縄文を施文後櫛描文が施される。また、側面には2本の沈線による山形文が施される。石籬は長さ3.7cm、最大幅1.5cm、最大厚0.7cmで、石材はチャートである。



第3図 調査区全体図 (1 / 400)



第4図 S101平・断面図



第5图 SI01出土遺物実測図

SI02 (第6・7図)

位置 調査区東側中央付近に位置する。**平面形** 南北4.8m×東西3.0mの楕円形。北東部に木の根拔根によると思われる攪乱が入る。**方位** N-14°-E **床面** ローム地山。**壁** 確認面から深さ10～26cm。**柱穴** 対角線上に4本の柱穴を確認。何れも円形の柱穴で、深さは20～40cm。**炉** ほぼ中央に地床炉が1基確認された。中央の床面は良く焼けている。**覆土状況** 自然堆積。

遺物

1は、複合口縁部片である。口縁部及び頸部に附加条2種の縄文が施され、口唇部に縄文原体により押捺がされる。色調は淡褐色。2は頸部片で、櫛描きによる連弧文が施される。色調は赤褐色で、胎土に石英、長石をやや多く含む。3～6は胴部片で、附加条1種の縄文が施される。色調は3が赤褐色、4が淡褐色、5が暗褐色、6が黒褐色。6は内外面とも焦げ付いている。7は底部片で、胴部に附加条1種の縄文が施され、底部は布目痕が残る。色調は淡褐色。

SI03 (第8・9図)

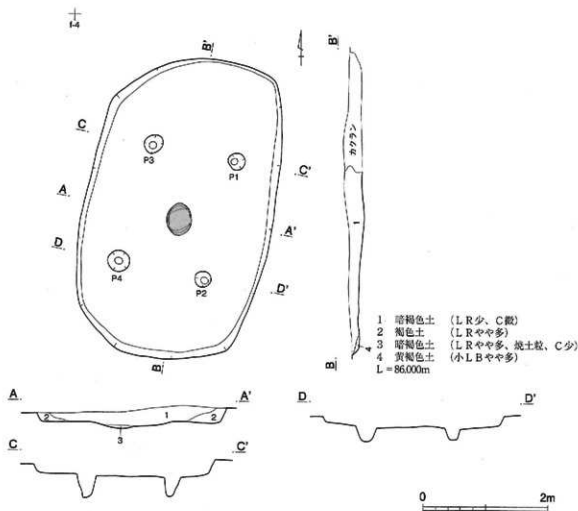
位置 調査区のほぼ中央に位置する。**平面形** 南北4.95m×東西4.25mの隅丸長方形。**方位** N-5°-E **床面** ローム地山。**壁** 確認面から深さ24～32cm。**柱穴** 対角線上に4本の柱穴を確認。そのうちのP2以外の3本は長軸30～40cm、幅15～20cmの楕円形状のもので、円形の柱材とは違ったものを立てていた可能性がある。**炉** ほぼ中央に地床炉が1基確認された。中央の床面は良く焼けている。**覆土状況** 自然堆積。

遺物

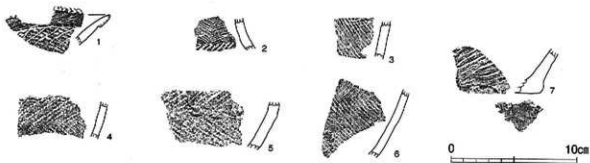
1～9は、口縁部片である。1は3段の複合口縁で、附加条第1種の縄文が施され、口唇部に縄文原体による押捺がされる。小孔の開いた棒状付文が3個1対で貼り付けられる。色調は褐色で、石英、長石等をやや多く含む。2は複合口縁で、附加条第1種の縄文が施され、縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。棒状付文が2個1対で貼り付けられる。色調は褐色で、砂粒を多く含む。3は3段の隆帯に棒状工具による刺突が施される。色調は暗褐色。4は複合口縁で、口縁部に附加条1種の縄文が施され、縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。頸部には附加条2種の縄文が施される。色調は褐色。5は複合口縁で、附加条第1種が施される。色調は淡褐色。6は複合口縁で、附加条第1種の縄文が施され、口縁部下端に縄文原体による押捺がされる。色調は黒褐色。7は附加条第1種の縄文が施される。色調は褐色。8は複合口縁で、口縁部は無文、縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。頸部に連弧文が施される。色調は暗褐色で、外面に煤が付着している。9は複合口縁で、附加条第1種の縄文が施され、口縁部下端に縄文原体による押捺がされる。頸部は上段に連弧文、下段に山形文が施される。色調は暗褐色。

10～13は頸部片である。10は櫛描きによる縦区画文と波状文が施され、色調は褐色。11は櫛描きによる波状文と横位の直線文が施される。色調は褐色。12は頸部に櫛描きによる波状文と横位の直線文が施され、胴部上半に附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色で、外面に煤が付着する。13は櫛描きによる叢状文が施され、胴部上半には附加条1種の縄文が羽状に施される。色調は褐色で、外面に煤が付着する。

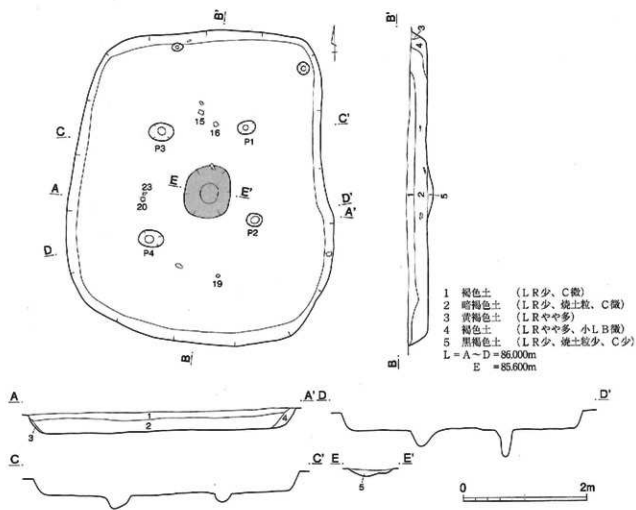
14～18は胴部片である。14～17は附加条第1種の縄文が施され、18は附加条第2種が施される。色調は14と16が赤褐色、15が褐色、17と18が淡褐色。



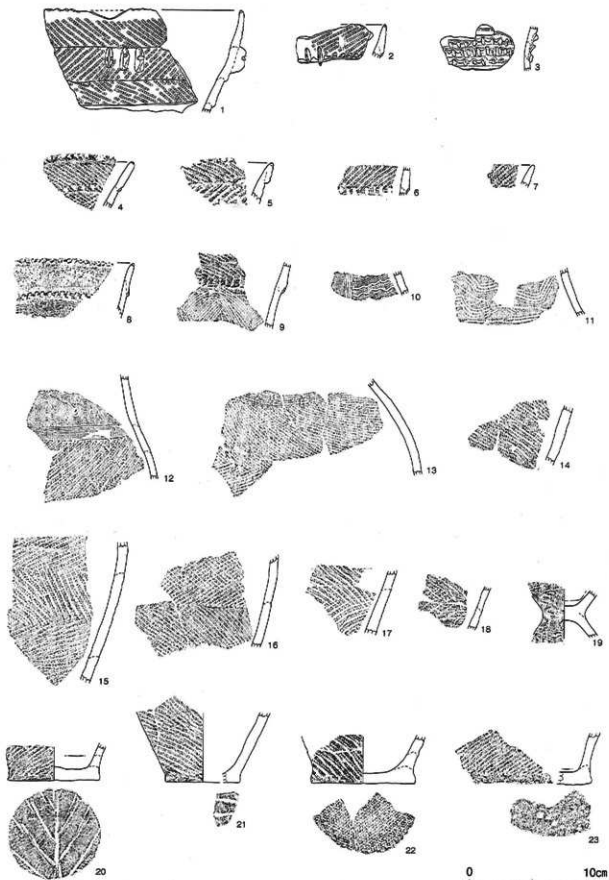
第6図 SI02平・断面図



第7図 SI02出土遺物実測図



第8图 SIO3平·断面图



第9図 SI03出土遺物実測図

19は高坪の脚部片で、附加条の縄文が施される。色調は褐色で、胎土に角閃石をやや多く含む。20～23は底部片である。20と21は胴部に附加条1種の縄文が施され、底部に木炭痕が残る。20の底径は7.2cm、21の底径は6cm。色調は20が暗褐色、21が淡褐色。22は底径が8.4cmで、胴部に附加条1種の縄文が施され、底部に布目痕が残る。色調は黒褐色。23は胴部に附加条1種の縄文が施され、底部は摩耗している。色調は橙褐色。21と22は内面が焦げ付いている。

SI04 (第10～12図)

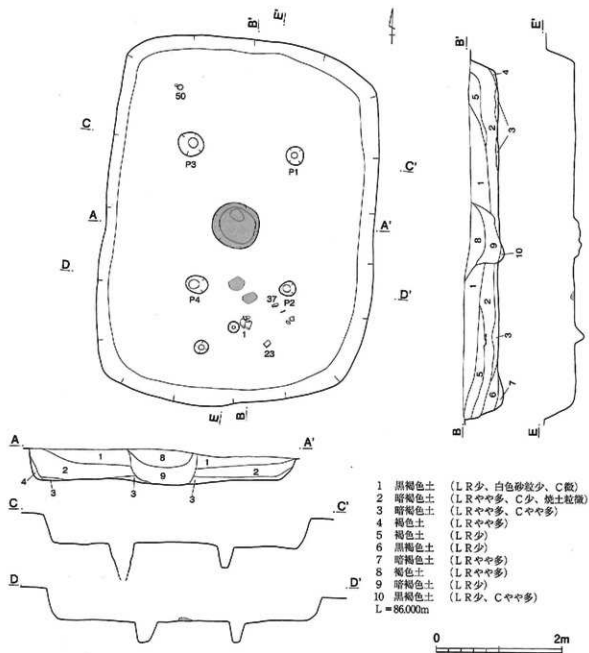
位置 調査区南西部に位置する。**平面形** 南北5.8m×東西4.4mの隅丸長方形。**方位** N-4°-E
床面 ローム地山。**壁** 確認面から深さ36～60cm。**柱穴** 対角線上に4本の柱穴を確認。柱穴は円形で、深さは30cm～60cm。**炉** ほぼ中央に地床炉が1基確認された。中央の床面は良く焼けている。**覆土状況** 自然堆積。覆土に炭化物や焼土をやや多く含む。**備考** 2号墳と重複。住居跡中央に新しい時期の土坑状の掘り込みを確認した。

遺物

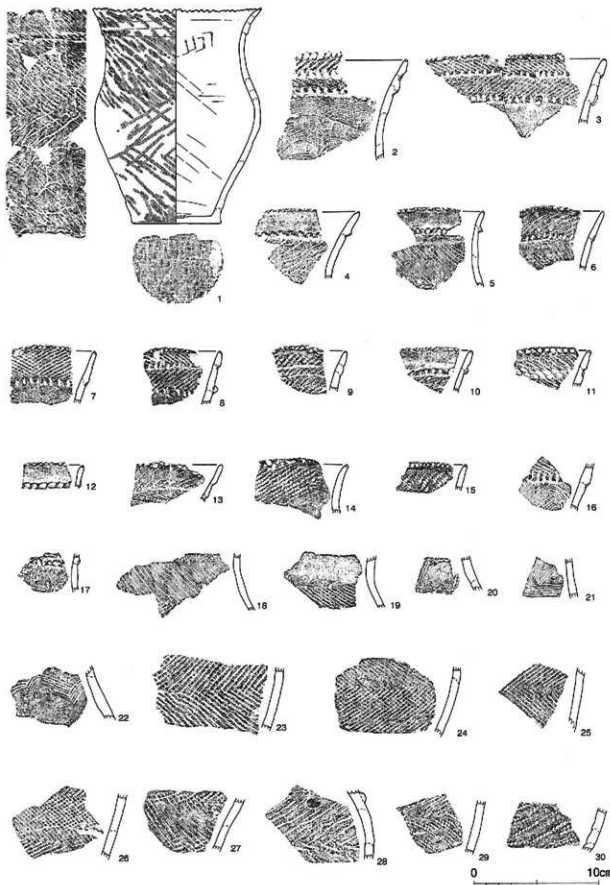
1はほぼ完形の土器で、住居跡の埋土中層より出土している。複合口縁で、口縁部には附加条第1種の縄文が施され、口唇部に縄文原体による押捺がされる。頸部は緩く屈曲し、胴部中位に最大径を有する。頸部～胴部にかけても附加条1種と思われるが、軸繩の条にそって巻かれていない。口径は13.4cm、器高17cm、底径7.2cmである。底部は布目痕が残る。色調は橙褐色。

2～17は口縁部片である。2は2段の複合口縁で、附加条1種の縄文が施され、縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。頸部は柳描きによる連弧文が施される。色調は暗褐色。3は2段の複合口縁で、附加条第1種の縄文が施され、縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。色調は橙褐色。4は複合口縁で、口縁部は無文、縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。頸部は附加条2種の縄文が施される。色調は赤褐色。5は複合口縁で、口縁部は無文、縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。頸部は附加条1種の縄文が施される。色調は淡褐色。6は複合口縁で、口縁部は附加条1種の縄文が施され、縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。頸部は附加条1種の縄文が施される。色調は淡褐色。7は複合口縁で、口縁部は附加条1種の縄文が施される。縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。頸部は波状文が施される。色調は暗赤褐色。8は2段の複合口縁で、口縁部は附加条1種の縄文が施される。縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。付文が1個貼り付けられる。色調は赤褐色。9は複合口縁で、口縁部は附加条1種の縄文が施される。縄文原体により口唇部が押捺される。色調は淡褐色。10は複合口縁で、口縁部は無文、頸部が附加条1種の縄文が施される。縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押捺される。色調は淡褐色。11は複合口縁で、口縁部は附加条1種の縄文が施される。縄文原体により口唇部が押捺される。色調は暗褐色。12は複合口縁で、口縁部は無文、縄文原体により口唇部が押捺され、口縁部下端が指頭により押捺される。色調は淡褐色。13は複合口縁で、口縁部は附加条1種の縄文が施され、色調は淡褐色。14と15は単節縄文が施され、縄文原体により口唇部が押捺される。色調は褐色。16は複合口縁で、口縁部は附加条1種の縄文が施される。縄文原体により口縁部下端が押捺される。頸部は連弧文が施される。色調は暗褐色。17は複合口縁で、柳描きによる縦区画文と波状文が施され、色調は褐色。

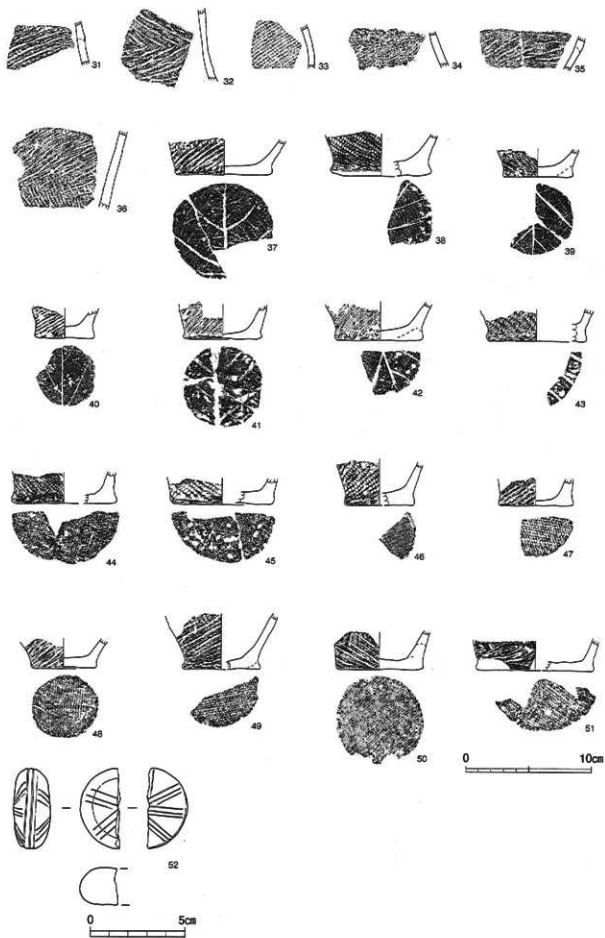
18～22は頸部片である。18は附加条1種の縄文が施され、色調は淡褐色。19は頸部が無文で、胴部上半に附加条1種の縄文が施されている。20は柳描きによる縦区画文と波状文が施されてい



第10图 SI04平·断面图



第11圖 S104出土遺物実測圖(1)



第12圖 SI04出土遺物実測圖(2)

る。色調は暗褐色。21は櫛描きによる山形文と横位の直線文が施されている。色調は暗褐色。22は櫛描きによる連弧文が施されている。色調は淡褐色。

23～36は胴部片である。23～29は附加条第1種の縄文が施され、色調は23・29が暗褐色、24が橙褐色、25～27が赤褐色、28が黒褐色。30～32は附加条第2種で、色調は30・31が淡褐色、32が暗褐色。33は単節の斜縄文で、色調は黒褐色。34・35は附加条1種の縄文が施される。色調は黒褐色。36は附加条1種の縄文が施される。色調は淡褐色。

37～51は底部片である。37～43は木葉痕が残る。色調は37・40が褐色、38・39・41が淡褐色、42が黒褐色、43が赤褐色。44～51は布目痕が残る。色調は44・46・47・49・51が淡褐色、45・48・50が褐色。

このほかに、紡錘車1点が出土している。土製で、直径は4.4cm、厚さが1.8cm。両面及び側面に3本の沈線文が施される。

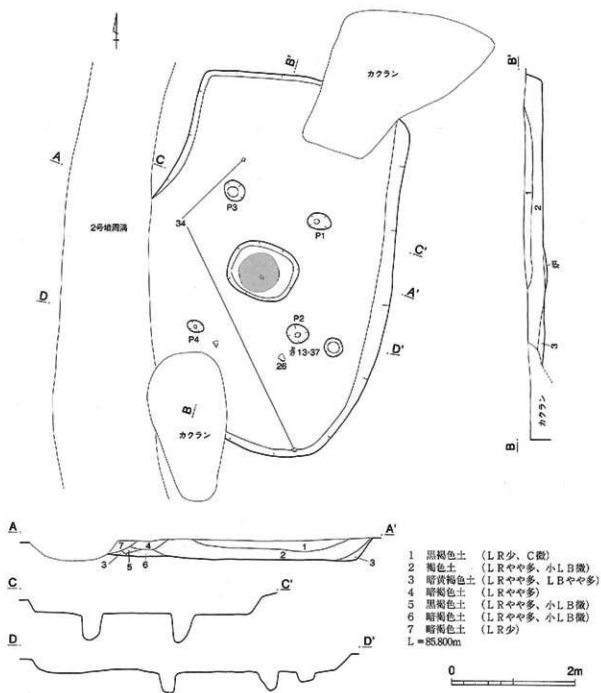
SI05 (第13～15回)

位置 調査区南西部に位置する。**平面形** 南北5.85m×東西3.6mの隅丸長方形。**方位** N-14°-E **床面** ローム地山。壁 確認面から深さ17～35cm。**柱穴** 対角線上に4本の柱穴を確認。そのうちのP1とP4は長軸30～40cm、幅15～20cmの楕円形状のものである。深さは、30～50cm。**炉** ほぼ中央に地床炉が1基確認された。中央の床面は良く焼けている。**覆土状況** 自然堆積。備考 2号墳の周溝により西壁が削平されている。北東部隅も攪乱を受けている。

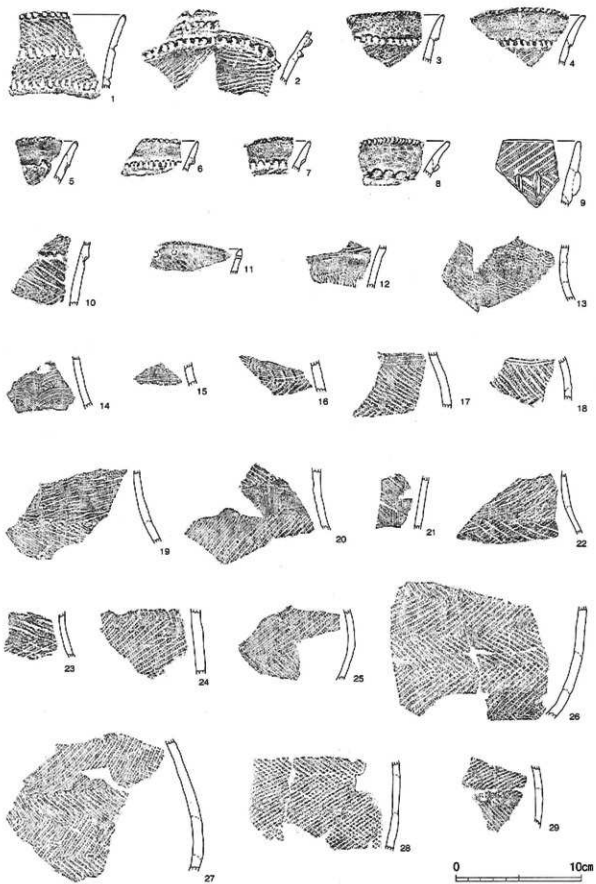
遺物

1～11は、口縁部片である。1は2段の複合口縁で、附加条第1種が施され、口唇部が縄文原体による押捺、口縁部下端が棒状工具による刺突がなされる。色調は暗褐色。2は口縁部に貼り付けた2段の隆帯に、縄文原体による押捺がなされる。頸部には附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色で、胎土に砂粒を多く含む。3は1段の複合口縁で、口縁部が無文、口唇部がへら状工具による刻み、口縁部下端に縄文原体による押捺がなされる。頸部には附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色で、外面に煤が付着する。4は1段の複合口縁で、口縁部が無文、口唇部及び口縁部下端に縄文原体による押捺がなされる。頸部には附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色で、胎土に砂粒・小石を多く含む。5は1段の複合口縁で、口縁部が無文、口唇部がへら状工具による刻み、口縁部下端に棒状工具による刺突がなされる。頸部には附加条1種の縄文が施される。色調は黒褐色で、外面に煤が付着する。6は口縁部に貼り付けた隆帯に、口唇部及び口縁部下端に縄文原体による押捺がなされる。色調は淡褐色。7は1段の複合口縁で、口縁部は無文で、口唇部がへら状工具による刻み、口縁部下端が棒状工具による刺突がなされる。色調は黒褐色で、外面に煤が付着する。8は複合口縁で、口縁部は無文で、口唇部はへら状工具による刻み、口縁部下端は指頭による押捺がなされる。色調は淡褐色で、胎土に砂粒を多く含む。9は2段の複合口縁で、口縁部は附加条1種の縄文が施される。棒状付文が2個1対で貼り付けられる。色調は褐色。10は複合口縁で、口縁部に附加条1種の縄文が施され、口縁部下端に縄文原体による押捺がなされる。頸部は附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色。11は器種が不明のもので、口縁部に小孔を2つ穿つ。口唇部がへら状工具による刻み、口縁部に附加条1種の縄文が施される。色調は褐色で、胎土に角閃石をやや多く含む。

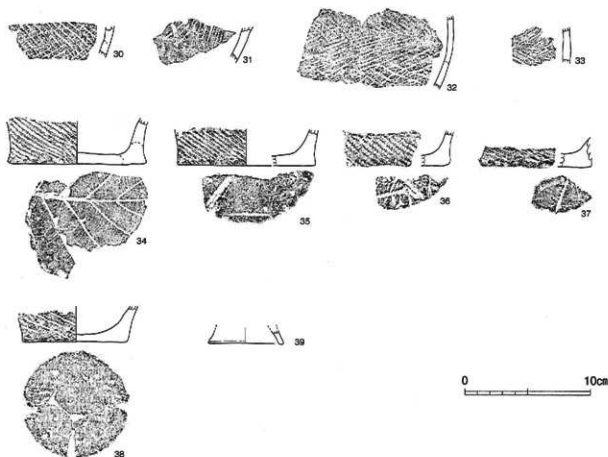
12～23は頸部片である。12と13は櫛描きによる波状文が施される。色調は12が赤褐色、13が



第13図 S105平・断面図



第14图 SI05出土遺物実測図(1)



第15図 SIO5出土遺物実測図 (2)

淡褐色。14は柳描きによる連弧文が施される。色調は暗褐色。15は柳描きによる横位の直線文が施される。色調は褐色。16は柳描きによる連弧文と籐状文が施される。胴部上半に附加条1種の縄文が施される。色調は褐色。17は籐状文が施され、胴部上半に附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色で、外面に煤が付着する。18は柳描きによる横線文が施され、胴部上半に附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色で、外面に煤が付着する。19は地文に附加条1種の縄文が施され、さらに縦位の柳描きによる波状文が施される。色調は黒褐色。20は頸部上段が附加条1種の縄文が施され、下段が幅の狭い無文帯である。胴部上半に附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色で、砂粒、小石をやや多く含む。21は重山形文が施される。色調は橙褐色。22と23は頸部に附加条1種、胴部上半に附加条2種の縄文が施されている。色調は暗褐色で、外面に煤が付着する。

24～33は胴部片である。24～31は附加条第1種が施され、色調は24が暗赤褐色、25～27・31が暗褐色、28が褐色、29が赤褐色、30が淡褐色。32は上段に附加条1種、下段に附加条2種の縄文が施される。色調は黒褐色で、外面に煤が付着する。33は附加条2種の縄文が施される。色調は暗褐色。

34～38は底部片である。34・35は胴部下半が附加条1種の縄文を施し、底部は木葉痕が残る。色調は34が淡褐色で、35が暗褐色である。胎土は両者ともに砂粒や小石をやや多く含む。36は胴部下半に単節の斜縄文を施し、底部は木葉痕が残る。色調は褐色である。37は胴部下半に籐系文

を施し、底部は木葉痕が残る。色調は淡褐色。38は胴部下半に附加条2種の縄文を施し、底部は布目痕が残る。色調は暗褐色。39は高坏の脚部片である。色調は暗褐色。

SI06 (第16~18図)

位置 調査区北西部に位置する。**平面形** 南北1m×東西3.8mの隅丸長方形。**方位** N-17°-w
床面 ローム地山。**壁** 確認面から深さ40~50cm。**柱穴** 対角線上に4本の柱穴と長軸線上に1本の柱穴を確認。円形状のもので、深さが30~40cmである。**炉** ほぼ中央に地床炉が1基確認された。中央の床面は良く焼けており、南側に川原石が1個置かれていた。**覆土状況** 自然堆積。
備考 1号墳の周溝により西壁が削平されている。北側も掘乱により大きく削平されている。

遺物

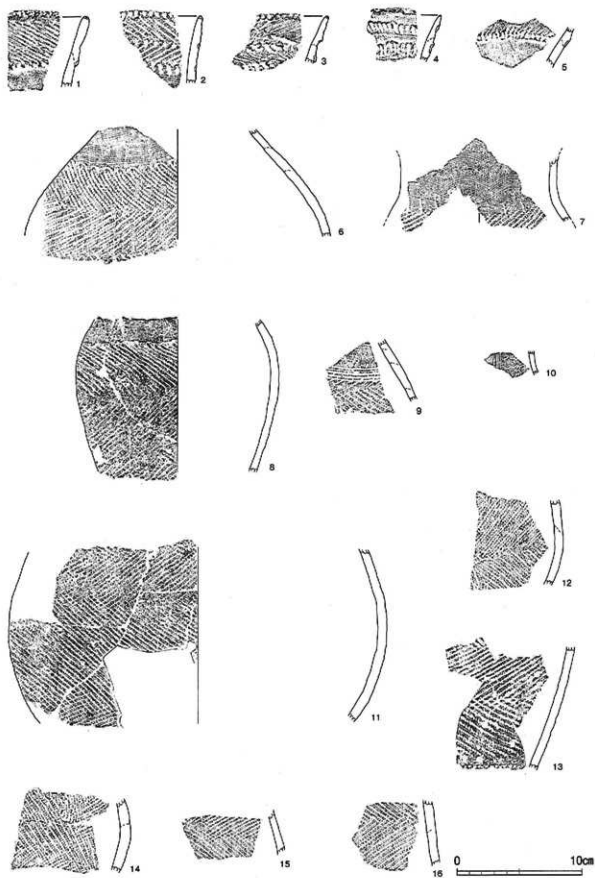
1~5は、口縁部片である。1は1段の複合口縁で、附加条第1種が施され、縄文原体により口唇部及び口縁部下端が押擦られる。色調は暗褐色。2は単口縁で、附加条1種の縄文が施され、頸部に連弧文が施される。縄文原体により口唇部及び口縁部に2段の押擦がされる。色調は黒褐色。3は2段の複合口縁で、附加条1種の縄文が施される。縄文原体により口唇部及び口縁部下端に押擦がなされる。色調は黒褐色。4は2段の複合口縁で、口唇部に縄文原体による押擦、口縁部下端に棒状工具による刺突がなされる。色調は暗褐色。5は1段の複合口縁で、附加条1種の縄文が施され、頸部は無文である。口縁部下端に棒状工具による刺突がなされる。色調は黒褐色。

6~10は頸部片である。6は頸部に櫛描きによる山形文と横位の直線文が施され、胴部に羽状の附加条1種の縄文が施される。色調は淡褐色で、胎土に砂粒・小石をやや多く含む。外面には煤が付着する。7は頸部に櫛描きによる連弧文と簾状文が施され、胴部に附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色で、胎土に砂粒をやや多く含む。8は頸部が無文で、胴部に羽状の附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色で、胎土に砂粒をやや多く含む。9は頸部に櫛描きによる波状文と横位の直線文が施され、胴部に羽状の附加条1種の縄文が施される。色調は淡褐色。10は頸部に櫛描きによる縦区画文と波状文が施される。色調は暗褐色。

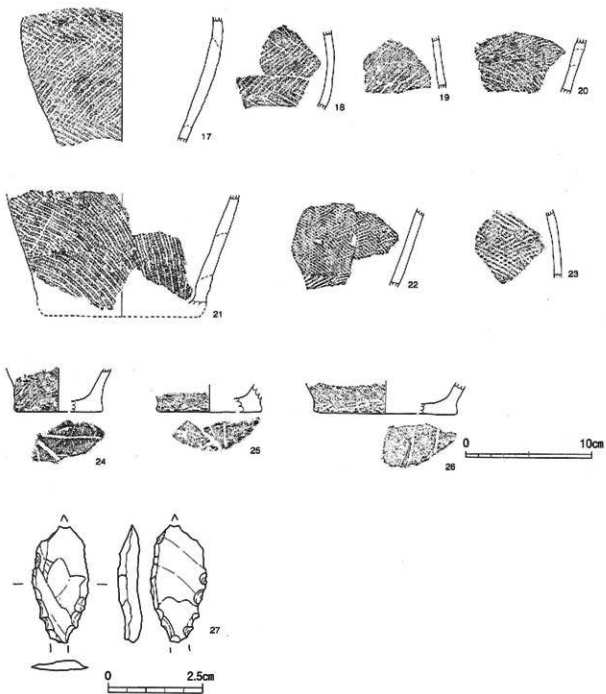
11~23は胴部片である。11~21は附加条第1種が施される。色調は11・12・17・20が暗褐色、13・16が淡褐色、14・18が黒褐色、15・19が赤褐色、21が褐色。11・14・17・18は外面に煤が付着する。22は燃糸文で、色調は黒褐色。胎土に砂粒・小石をやや多く含む。外面に煤が付着する。23は附加条2種の縄文が施される。色調は暗褐色。

24~26は底部片である。24は胴部下半に附加条1種の縄文が施され、底部は木葉痕が残る。色調は暗褐色で、胎土に砂粒を多く含む。25は胴部下半に燃糸文が施され、底部は木葉痕が残る。色調は淡褐色。26は木葉痕が残る、色調は淡褐色。

このほかに削器と思われる石器が1点出土している。長さは3cm、最大幅1.5cm、厚さ0.3cmである。石材はチャート。



第17图 SI06出土遺物実測図(1)



第18圖 SI06出土遺物実測図(2)

(2) 古墳

調査以前はほぼ平坦になっており、踏査の際に凝灰岩の破片などが散在していた。確認調査の結果、2基の古墳が確認された。北側の方墳を1号墳(SZ1)、南側の円墳を2号墳(SZ2)とした。

1号墳(SZ1)

位置 本古墳は調査区の北西側に位置する。

墳丘と周溝(第19図)

墳丘部分は削平され、現状では古墳があることがわからなかった。周溝は方形にめぐり、北西部が大きく攪乱を受けていたほか、南東コーナーや主体部付近も攪乱を受けていた。北東部のコーナー付近は浅くなり一部周溝が途切れていたと考えられる。周溝の内側立ち上がり部分で掘った墳丘規模は南北19.7m、東西19m、周溝外側では、南北23m、東西22.5mである。墳丘のほぼ中心に横穴式石室の奥壁が位置したと思われる。

周溝幅は、最大が東側で2.3m、最小が北側で1.3mである。周溝内の深さは一定ではなく南側が70cmと深く、西側と東側は40～60cm、北側が70cmである。周溝底面は、ローム層である。覆土は、自然堆積で、大きく3層に分けられる。

南側周溝のほぼ中央に周溝内土坑が1基確認できた。東西2.2m、南北1.2m、深さ約1mである。出土遺物はなかった。

切り合い関係は、時期不明のSD01が南西から南東にかけて墳丘を切る。また、弥生時代のS106が古墳の周溝により切られている。

埋葬施設(第20・21図)

埋葬施設は横穴式石室である。石室は、大きく攪乱を受けており、天井石及び側壁の石材はすべて取り除かれ、床石部分しか残っていなかった。横穴式石室の位置はやや南寄り、奥壁があったと思われる位置は墳丘中心より約0.5m南となっている。

掘り方は、黒色地山から掘り込まれている。その形状は、玄室部分が南北に長い方形で、南北2.8m、東西2.24mで、確認面からの深さは約30～40cmである。玄室の全長は奥壁及び側壁が残っていないため、床石からの推定となるが、長さ2.4m、幅1.25mであったと考えられる。床石は2層の玉石が敷かれ、その下に凝灰岩片や粉混じりの層が薄く入り、さらにその下には5～8cmのローム主体の硬い整地層が確認できた。また、奥壁側には長さ20cm前後の細長い川原石を根石として半円形状に並べている状況が観察できた。これは、本遺跡から北西500mほどのところにある針ヶ谷新田古墳群3号墳と同じ造り方であることからこの上に凝灰岩の奥壁がのっていたと考えられる。

玄門付近にも長さ20cm前後の細長い川原石が3個並んで確認できた。その南側に後世の溝が入り、20cmの段差をもって羨道部となる。羨道部の石材もほとんど抜かれており一部川原石が残っているのみであるが、羨道幅は0.8mで、長さ0.9m付近までは川原石が積まれていたものと想定される。その南側に墓道と思われる浅い掘り込みが1.6m程続くが、その先は不明である。

出土遺物(第22図)

周溝内上層から須恵器高台付環3点、甕3点、壺1点、土師器環2点が出土した。

1は須恵器甕の胴部片で、外面に格子目のタタキ、内面に同心円の当て具痕が残る。色調は灰白色。2は須恵器甕の胴部片で、外面に平行タタキ、内面に同心円の当て具痕が残る。色調は灰色。

3は須恵器甕の口縁部片で、口縁部に突帯がめぐる。色調は灰褐色。4は須恵器壺の胴部片で、外面に自然軸がかかる。色調は灰色。5は須恵器高台付坏で、口径15.4cm、器高4.5cm、底径9.6cmである。回転ヘラケズリ後高台を付す。色調は青灰色。胎土は緻密。6は須恵器高台付坏で、底径10cmである。色調は灰色。胎土は緻密。回転ヘラケズリ後高台を付す。7は須恵器高台付坏で、底径9.8cmである。回転ヘラケズリ後高台を付す。色調は灰色。胎土は緻密。8は土師器坏で、口縁部ヨコナデ、体部はヘラケズリ調整。色調は褐色。9は土師器坏で、平底で、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ調整。色調は赤褐色。

2号墳 (SZ2)

位置

本古墳は1号墳の南方約15mに位置する。

墳丘と周溝 (第23図)

墳丘部分は削平され、1号墳同様、現状では古墳があることがわからなかった。周溝はほぼ円形にめぐる。周溝の内側立ち上がり部分で測った墳丘は南北23m、東西23.5m、周溝外径は、南北26m、東西25.8mである。周溝の円の中心はほぼ横穴式石室奥壁の位置である。

周溝幅は1.4～1.8mで、確認面からの深さは30～70cmで、南側が一番深い。周溝底面は、地山ローム層である。覆土は自然堆積である。

切り合い関係は、周溝西側により弥生時代の竪穴住居跡 (S105) が切れ、墳丘のほぼ中央部北側で弥生時代の竪穴住居跡 (S104) が確認できた。

埋葬施設 (第24図)

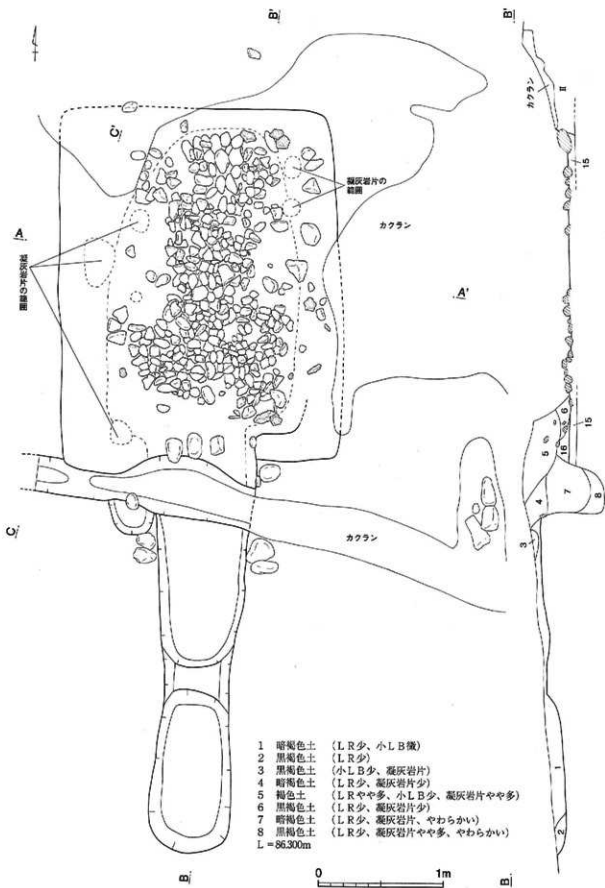
埋葬施設は横穴式石室である。石室は、大きく攪乱を受けており、天井石及び側壁の石材はすべて取り除かれ、床石部分の一部しか残っていなかった。横穴式石室の位置はやや南寄り、奥壁があったと思われる位置は墳丘中心より約0.5m南となっている。

掘り方の形状は、玄室部分が南北に長い方形で、南北3.6m、東西2.84mで、確認面からの深さは約40～50cmである。玄室の全長は奥壁及び側壁が残っていないため、床石からの推定となるが、長さ2.8m、幅0.8～1.3mであったと考えられる。床石には玉石が敷かれ、その下に凝灰岩片混じりの硬くしまった層が入り、さらにその下には第24図2・8～10層が層状に確認できた。また、奥壁側には長さ20cm前後の細長い川原石を根石として半円形状に並べている状況が観察できた。また、奥壁部分と思われる地点で凝灰岩の破片や粉が多く出土し、この部分に凝灰岩製の奥壁があったものと考えられる。また、玄門付近で東西50cm、南北30cm、深さ25cmのピットを確認したが、根石等玄門に関する石材の抜き取り痕の可能性も考えられる。なお、この付近でも凝灰岩片がやや多く見つかっている。

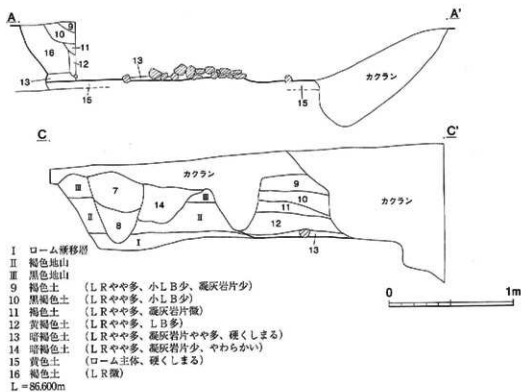
羨道部及び墓道に関する遺構は削平されてしまったためか、痕跡も一切確認できなかった。

出土遺物 (第25図)

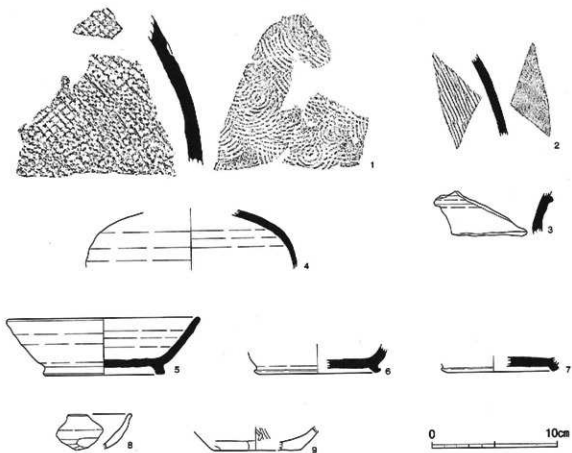
南側周溝上層から、石室の石材として使用されたとと思われる凝灰岩と直刀片が出土した (第23図)。石室の破壊の際に周溝部分に投棄されたものと考えられる。直刀は現存の長さが38cm、幅3.8cmである。



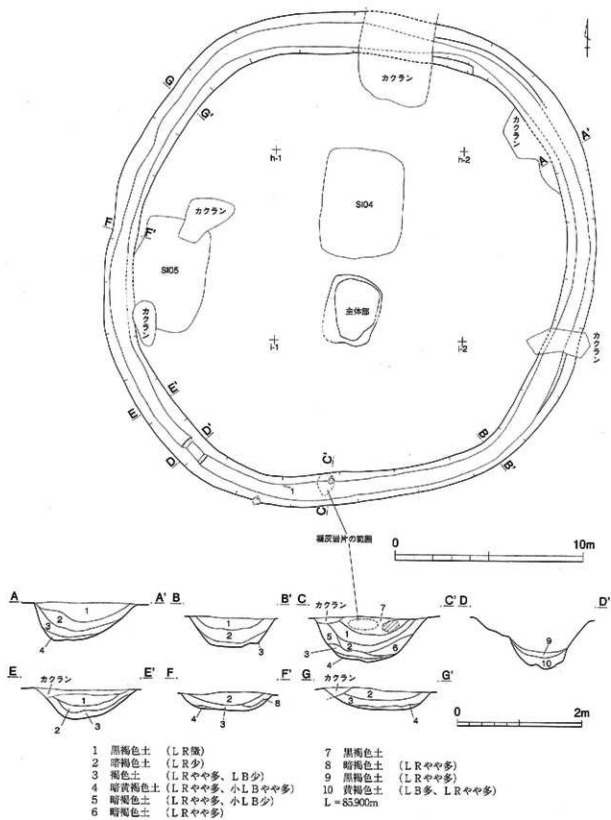
第20図 1号墳主体部平・断面図



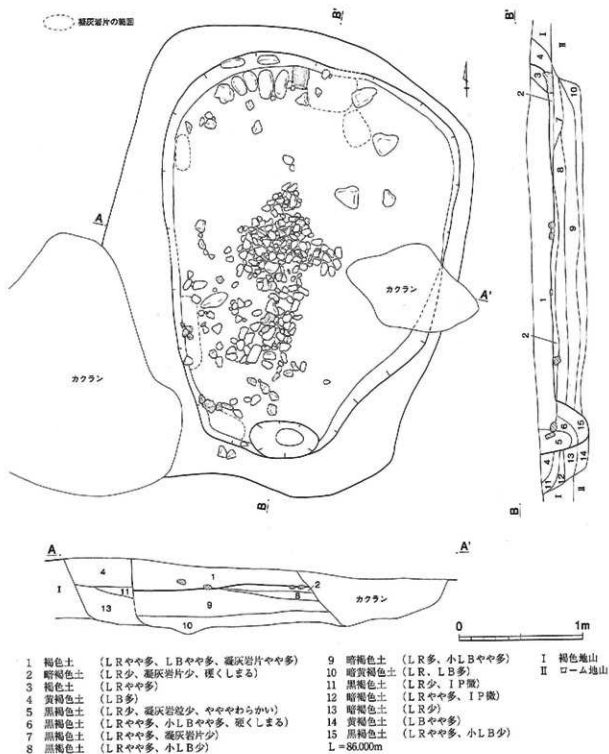
第21図 1号墳主体部断面図



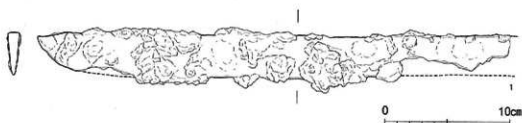
第22図 1号墳出土遺物実測図



第23図 2号墳平・断面図



第24図 2号墳主体部平・断面図



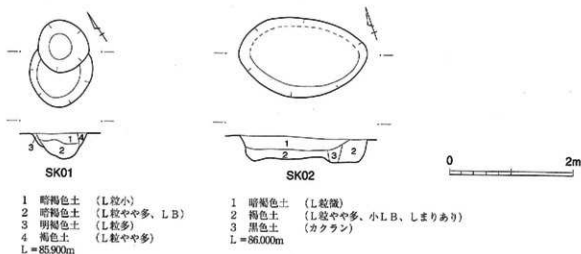
第25図 2号墳出土直刀実測図

(3) 土坑

調査区の中央で、土坑2基を確認した。

SK01は、長軸が1.2m、短軸が1m、確認面からの深さが40cmの楕円形の土坑で、2段に掘り込まれている。出土遺物は無。

SK02は、長軸が2.2m、短軸が1.4m、確認面からの深さが35～40cmの楕円形の土坑である。出土遺物は無。



- SK01
- 1 暗褐色土 (L粒小)
 - 2 暗褐色土 (L粒やや多、LB)
 - 3 明褐色土 (L粒多)
 - 4 褐色土 (L粒やや多)
- L = 85.900m

- SK02
- 1 暗褐色土 (L粒微)
 - 2 褐色土 (L粒やや多、小LB、しまりあり)
 - 3 黒色土 (カクラン)
- L = 86.000m

第26図 土坑平・断面図

(4) 溝状遺構

SD01は、1号墳を切る溝状遺構である。長さ30mで一旦途切れ、SI02の南東コーナー付近から13m程確認された。幅は0.6～0.8mで、確認面からの深さは20～30cmで、断面U字形である。

(5) その他の出土遺物 (第27・28図)

1と2は須恵器蓋片である。1は宝珠状摘みが付く。色調は灰色。胎土に白色砂粒を多く含む。2は口径14cmで、色調は青灰色。胎土に白色砂粒をやや多く含む。外面に自然釉が付着。

3～13は弥生土器片である。3は2段の複合口縁で、波状文が施される。口唇部及び口縁部下端に縄文原体による押捺がなされる。頸部に波状文が施される。色調は暗褐色。4は2段の複合口縁で、附加条1種の縄文が施される。口唇部及び口縁部下端に縄文原体による押捺がなされる。色調は淡褐色。5は1段の複合口縁で、附加条1種の縄文が施される。口唇部及び口縁部下端に縄文原体による押捺がなされる。色調は淡褐色。6は複合口縁部で附加条1種の縄文が施される。口唇部にヘラ状工具による刻みがなされる。色調は黒褐色。7は頸部片で、櫛掻きによる連弧文が施される。色調は褐色。胎土に石英、長石をやや多く含む。8は頸部片で、頸部に山形文と籐状文が施され、胴部上半に附加条1種の縄文が施される。色調は赤褐色。砂粒を多く含む。9は頸部片で、頸部に横位の直線文が施され、胴部に附加条1種の縄文が羽状に施される。色調は暗褐色。胎土に石英、長石をやや多く含む。10は頸部片で、附加条1種の縄文が施される。色調は暗褐色。外面に煤が付着する。11と12は底部片で、木葉痕が残る。底径は11が13.4cm、12が6.2cm。11は色調が褐色で、胎土に砂粒、小石を多く含む。12は色調が褐色である。13は小形土器の底部片で、色調は褐色である。4・6・9・11は2号墳周溝内から出土し、その他は表採である。

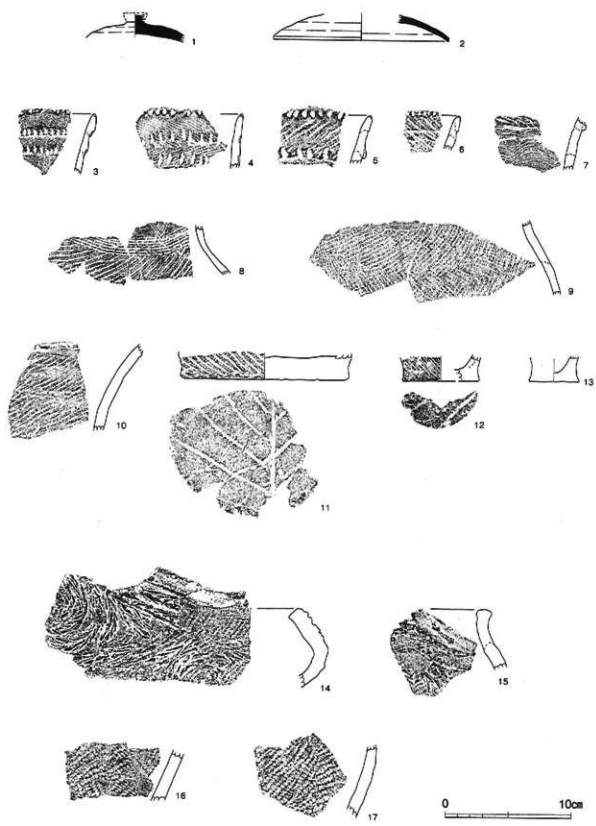
14～26は縄文土器片である。14と15は同一個体と思われる波状口縁で、地文にLRの縄文が施され、その上に隆帯を貼り付け、さらに刺突が施される。色調は橙褐色。胎土に砂粒、赤色スコリア粒をやや多く含む。16・17はLRの縄文を施す色調は淡褐色で、砂粒を多く含む。18は口縁部片で、地文にRLの縄文を施し、その上に横位の3条の沈線を施す。色調は暗褐色で、胎土に砂粒、雲母を多く含む。外面に煤が付着する。19と20は同一個体と思われる波状口縁で、隆沈線が施される。色調は暗褐色。21は地文にLRの縄文を施し、横位の隆沈線が施される。色調は暗褐色。22は胴部片で地文にRLの縄文を施し、1条の沈線が垂下する。色調は暗褐色。胎土に砂粒、雲母を多く含む。23～25は同一個体と思われる胴部片で、地文にLRの縄文が施され、2本の沈線により無文帯を区画する。色調は暗褐色。外面に煤が付着する。26は口縁部片で、口唇部に縄文原体による押捺が施され、RLの縄文が施される。色調は橙褐色。19～25はSI03の覆土中から出土し、その他は表採である。

27は土製円盤である。長軸4cm、短軸3.2cmの楕円形で、縄文が施される。

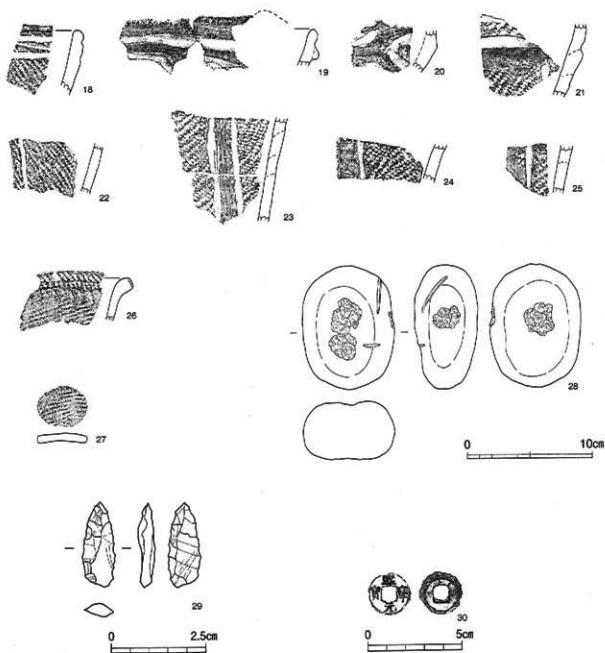
28は磨石である。形状は楕円形を呈し、最大長9.6cm、最大幅7.2cm、最大厚5cm。2号墳周辺で出土した。

29は石器片で、最大長2.3cm、最大幅0.8cm、最大厚0.4cm。石材はチャートである。2号墳周辺で出土した。

30は古銭である。「熙寧元寶」とかかれた北宋銭である。直径2.2cm、厚さ0.13mm。2号墳周辺で出土した。



第27図 その他の出土遺物実測図 (1)



第28図 その他の出土遺物実測図(2)

3 おわりに

(1) 弥生時代の遺構と遺物について

今回の調査で弥生時代後期(二軒屋式期)の竪穴住居跡が6軒確認された。住居跡同士の切り合い関係は見られず、住居跡間は適当な間隔を開けて配置されている。住居跡の平面形は、SI02がやや楕円形に近い長方形であるが、そのほかは隅丸長方形である。主軸の方位は若干のばらつきがあるが、すべての住居跡が南北方向に長い。住居跡内の構造も、基本は4本主柱穴で、中央に地床炉があり、共通性が窺える。規模もSI02がやや小ぶりであるほかは、床面積が21～25㎡とほぼ同じ大きさである。

出土遺物は、ほとんどが土器で、その他に石鏃1点、紡錘車2点等が出土している。

本遺跡の弥生土器を部位毎にその特徴をまとめてみると、次のようになる(第2表)。

口縁部：1段もしくは2段の複合口縁で、附加条1種の縄文を施文するものが多く見られる。1段の中には無文のもの見られる。

口唇部及び口縁部下端処理：刺突や縄文原体による押捺のものが多く見られる。

付文：2段の複合口縁部に棒状付文、胴部上半に円形付文を貼り付けるものが見られる。

頸部：櫛描きによる波状文、山形文、連弧文が多く見られ、その他に附加状縄文が見られるが、無文のものはほとんど見られない。

頸部区画：簾状文、直線文(注1)。

胴部：附加状第1種の羽状構成をとるものが多い。

底部：割合的には木葉痕が多いが、布目痕のものも一定量みられる。

以上のような土器様相は、真岡市柳久保遺跡出土の土器に類似する。橋本澄朗氏は柳久保遺跡出土土器の分析の中で、口縁部形態をA～Eの5タイプがあることを指摘されているが(橋本1984)、本遺跡においてもこの5つのタイプが見られる。尚、底部の木葉痕は柳久保遺跡では65点中57点(全体の87%が木葉痕)であるが、本遺跡では31点中17点(全体の55%が木葉痕)で、不明な1点を除くと残りは布目痕となり、その割合が柳久保遺跡に比べると多い。

柳久保遺跡の時期については、藤田氏が栃木県の弥生時代後期の編年の中でⅡ期に位置付けている(藤田2000)。藤田典夫氏が指摘するように、次のⅢ期段階の「十王台式」の出土が明確になってきている」という点から見て、本遺跡出土の土器群の中に明確な形での「十王台式」土器を見出すことはできず、Ⅱ期の位置付けが妥当と思われる(注2)。また、小玉秀成氏は、「二軒屋式」土器を扱った論文の中で、「1段の縄文施文複合口縁の幅広化、羽状構成の縄文、梯子状文、山形文、連弧文などの様々な頸部櫛描文の出現」を挙げ、このような土器群を栃木県域2期としている。さらに2期を2時期に分け、柳久保遺跡を後半に位置付けている(小玉2007)。これらのことから、本遺跡の土器群は藤田氏Ⅱ期、小玉氏の2期後半の段階と考えられる。

尚、SI05の上段に附加条1種縄文、下段に幅の狭い無文帯をもつものは、茨城県陣屋敷第32号住居出土のものに類似する(茨城県美浦村ほか1992)。茨城県の後期弥生土器の編年を検討された海老沢稔氏はこの住居跡をⅡ期に位置付けている(海老沢2000)。

次に遺構について、近隣の明城遺跡や本村遺跡と比較してみると、針ヶ谷新田遺跡がすべて隅丸長方形プランであるのに対し、前2者は隅丸方形プランのものが見られる。

明城遺跡は隅丸長方形の住居跡が4軒、隅丸方形の住居跡が2軒確認されている。隅丸方形の住居跡からは土師器が共存もしくは出土している。炉の位置は隅丸長方形のものが中央であるのに対し、隅丸方形のものは中央より壁際に寄っている。また、出入口と思われる部分に方形の掘り込み（貯蔵穴?）をもつものが多く見られる。君島利行氏は2号・4号・5号・7号（隅丸長方形）→1号・3号（隅丸方形）の変遷を考えられている（君島1995）。前者は藤田氏Ⅲ期、後者は藤田氏Ⅳ期に位置付けられている（藤田2000）。

本村遺跡は平成6年～10年にかけての調査地区（以下南地区）と平成18年の調査地区（北地区）の2地区で弥生時代後期の住居跡が確認されている。南地区では12軒、北地区では6軒が確認されている。南地区で隅丸長方形とわかるものは4軒、隅丸方形のものは3軒である。隅丸方形のものには十王台式土器が伴う例が見られ、藤田氏のⅢ期に位置付けられる。

本遺跡と同時期と考えられる真岡市柳久保遺跡1号住も長方形であることから、藤田氏Ⅱ期において隅丸長方形もしくは長方形の平面プランが主流であった可能性が指摘できる。

次にこの時期の集落景観についてみる。

県内において弥生時代後期の集落景観の全体像がわかる例はそれほど多くない。代表的なものとしては、上三川町の殿山遺跡、向原南遺跡、上ノ原遺跡が挙げられる（第29図下）。この3遺跡は、小河川により開折された低地を囲むような形で台地上に立地する。向原南遺跡は4軒、上ノ原遺跡は10軒、殿山遺跡は21軒が確認されている。このうち殿山遺跡はさらに小支谷により大きく2グループに分かれ、さらにその中で2グループに分かれることから、遺跡内を4グループ（D～G）に分けることができる。よって1グループ内の竪穴住居跡の軒数は5～8軒となる（注3）。

田川沿いの本村遺跡でも同様な状況が見られる（第29図上）。本村遺跡は、先に述べたとおり、谷を挟んで北地区と南地区に分かれる。北地区では6軒、南地区では12軒の竪穴住居跡が確認されているが、南地区においては、その位置関係や土師器が伴出する遺構があることなどから、少なくとも2時期の変遷が考えられ、1時期あたりは5～8軒と考えられる。

すでに埴静夫氏により弥生時代後期の集落規模については、柳久保遺跡や井頭遺跡の例から「2～5軒位が集中していたと解され」（埴1979）ている。また、橋本澄朗氏は、柳久保遺跡周辺の遺跡の分析から、「四～五軒の単位集団の人びとは、独自性を保ちながらも、時には他の単位集団の人びとと共同作業に従事し、広い意味において生業を分担していたと考えられる。」と指摘する（橋本1987）。

本遺跡においても、小支谷を望む舌状台地の南緩斜面上に6軒の住居跡による単位集団が営まれ、周辺の天狗原遺跡や二軒屋遺跡などと相互交流を図りながら、本地域の弥生社会を形成していたものと考えられる。

（参考文献）

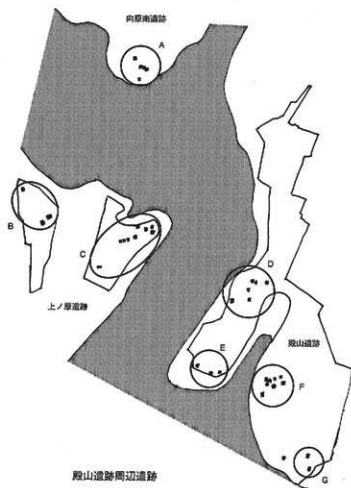
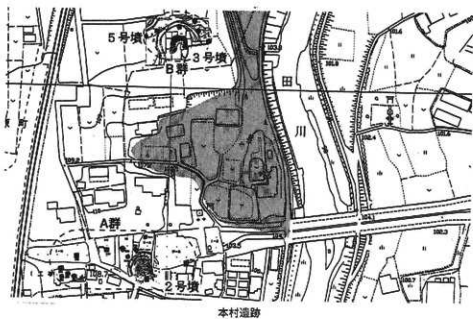
- 茨城県美浦村・臨平調査会 1992『茨城県稲敷郡美浦村陣屋敷遺跡』
- 海老沢純 2000『茨城県における弥生後期の土器編年』『東日本弥生時代後期の土器編年（第2分冊）』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 宇都宮市教育委員会2004『本村遺跡（弥生・古墳編）』
- 宇都宮市教育委員会2007『本村古墳群・本村遺跡』

No	遺跡名	遺構名	口部部				器部							附加部			土器 属性											
			瓦 釜 口 縁	瓦 蓋 口 縁	瓦 蓋 底 縁	付 文	縄 文	垂 文	波 文	段 文	段 区 間	段 区 間	段 区 間	段 区 間	段 区 間	段 区 間		段 区 間	段 区 間	段 区 間	段 区 間	段 区 間	段 区 間	段 区 間	段 区 間	段 区 間		
1	針ヶ谷遺跡	SI01	●			●	●	●																				
		SI02	●				●	●																				
		SI03	●			●	●	●																				
		SI04	●	●	●	●	●	●																				
		SI05	●	●	●	●	●	●																				
		SI06	●	●	●	●	●	●																				
2	天狗原遺跡	10分住	●	●	●																							
3	本村遺跡 (南地区)	SI01	●	●																								
		SI02	●		●																							
		SI03	●		●																							
		SI04	●		●																							
		SI05	●	●	●																							
		SI06	●	●	●																							
		SI07	●		●																							
		SI08	●		●																							
		SI09	●		●																							
		SI10	●		●																							
		SI11	●		●																							
SI12	●		●																									
4	本村遺跡 (北地区)	SI-1	●																									
		SI-2	●		●																							
		SI-3	●		●																							
		SI-4	●		●																							
		SI-5	●		●																							
		SI-6	●		●																							
5	明城遺跡	1号住	●		●																							
		2号住	●	●	●	●	●																					
		3号住	●		●																							
		4号住	●		●																							
		5号住	●		●																							
6	坂野野原遺跡	7号住	●		●																							
		掘区2号 掘区5号	●		●																							
7	上ノ原遺跡	YT-1	●	●	●	●																						
		YT-2	●		●	●																						
		YT-3	●		●	●																						
		YT-4	●		●	●																						
		YT-5	●		●	●																						
		YT-6	●		●	●																						
		YT-7	●		●	●																						
		YT-8	●		●	●																						
		YT-9	●		●	●																						
		YT-10	●		●	●																						
8	向原遺跡	YT-1	●		●																							
		YT-2	●		●	●																						
		YT-3	●		●	●																						
9	殿山遺跡	YT-4	●		●	●																						
		YT-1	●		●	●																						
		YT-2	●	●	●	●																						
		YT-3	●		●	●																						
		YT-4	●		●	●																						
		YT-5	●		●	●																						
		YT-6	●		●	●																						
		YT-7	●		●	●																						
		YT-8	●		●	●																						
		YT-9	●		●	●																						
		YT-10	●		●	●																						
YT-11	●	●	●	●																								
YT-12	●	●	●	●																								
YT-13	●		●	●																								
YT-14	●	●	●	●																								
YT-15	●		●	●																								
YT-16	●		●	●																								
YT-17	●		●	●																								
YT-18	●		●	●																								
YT-19	●		●	●																								
YT-20	●		●	●																								
YT-21	●		●	●																								

第2表 周辺弥生時代後期遺跡出土土器属性表

No	遺跡名	所在地	遺構名	形態	規模 (m)		面積 (㎡)	主柱穴	伊	備考			
					長さ	幅							
1	井ヶ谷新田	宇都宮市井ヶ谷町	SI01	楕円長方形	5.50	4.4	24.454	4	中央部				
			SI02	楕円形	4.8	3	14.4	4	中央部				
			SI03	楕円長方形	4.95	4.25	21.038	4	中央部				
			SI04	楕円長方形	5.8	4.4	25.52	4	中央部				
			SI05	楕円長方形	5.85	3.6	21.06	4	中央部				
			SI06	楕円長方形				4	中央部				
2	天狗塚遺跡	宇都宮市さつき1丁目	10号住	楕円長方形	5.7	4	22.8	4	中央部				
3	本村遺跡 (南地区)	宇都宮市本村町	SI01	楕円方形	3.5	3.5	12.25	4	中々北寄り	南関東系焼片が出土			
			SI02				2.75						
			SI03	楕円長方形	5.5	4.3	23.65	4	中央部	井ヶ谷武土野片が出土			
			SI04	楕円方形	4.6	4.3	19.78	4	中央部				
			SI05	楕円方形	4.6	4.1	18.86	4	中央部				
			SI06		5			4	西寄り				
			SI07	楕円長方形	4.95	4.1	20.295	5	中央部				
			SI08	楕円方形	4.5	4.1	18.45	4	中央部				
			SI09	楕円形		4.6		5	北寄り				
			SI10	長方形				4	中央部				
			SI11	長方形	5.15						土師器が出土		
			SI12	楕円長方形	5.5	4	22	4	中々北寄り				
4	本村遺跡 (北地区)		SI-1										
			SI-2	楕円方形	3				中央部				
			SI-3	楕円形	3.9	3.8	14.82	4	西寄り				
			SI-4	楕円長方形	4	3.4	13.6	4	中央部				
			SI-5										
			SI-6										
5	明城遺跡	壬午町岡谷	13号住	楕円方形	3.3	3.2	10.56	4	西寄り				
			29号住	楕円長方形	5.8	5.1	29.58	4	中央部				
			33号住	楕円方形	4.3	4.2	18.06	4	北寄り	土師器と共存			
			45号住	楕円長方形	4.7	4.1	19.27	6	中央部				
			54号住	楕円長方形	5	4.1	20.5	6	中央部				
			75号住	楕円長方形	5.6	4.5	24.75	6	中央部				
6	郡徳野川地蔵塔	宇都宮市瑞穂野	南院2号	楕円方形	4.7	4.4	20.68	4	中央部				
			南院5号	楕円方形	4.7	4.3	20.21	4	中央部				
			YT-1	楕円長方形	6.5	5.3	34.45	4	中央部				
			YT-2	楕円方形	4.1	3.7	15.17	4	中央部				
7	上ノ原遺跡	上三川町多功	YT-3	楕円方形	5.3	5.1	27.03	4	中々北寄り				
			YT-4	楕円長方形	5.2	3.9	20.28	4	中央部				
			YT-5										
			YT-6		4				中々南寄り				
			YT-7	楕円長方形	5.5	4.1	22.55	2	中央部				
			YT-8	楕円長方形	4.9	3.85	18.865	4	中央部				
			YT-9	楕円長方形	4.35	3.7	16.005	4	中央部				
			YT-10	楕円方形	4.3	4.25	18.275	4	中央部				
			8	只原前遺跡	上三川町多功	YT-1	楕円長方形	4	3	12			
						YT-2	楕円長方形	4.9	4.2	20.58		中央部	
YT-3	楕円方形					3.8							
YT-4	楕円長方形	3.35				2.8	9.38		西寄り				
9	鹿山遺跡	上三川町上神庄	YT-1	楕円長方形	4.5	3.8	17.1	4	中々北西より				
			YT-2	楕円長方形	5.6	4.6	25.76	4	中々北西より				
			YT-3	楕円長方形	4.2	3.9	16.38	4	中々北寄り				
			YT-4	楕円長方形	5.4	4.8	25.92	4	中央部				
			YT-5	楕円長方形	4.2	3.3	13.86	4					
			YT-6						中央部				
			YT-7						西寄り				
			YT-8					4	中央部				
			YT-9						中央部				
			YT-10	楕円長方形	7.2	6	43.2	4	北寄り				
			YT-11	楕円長方形	4.7	4.1	19.27	4	北寄り				
YT-12						北より							
YT-13	楕円長方形	4.2	3.5	14.7	4								
YT-14	楕円長方形	4.33			4	中央部							
YT-15	楕円長方形	5.4	4.65	25.11	4	北寄り							
YT-16	楕円長方形	4.6	3.7	17.02	4	中央部							
YT-17	楕円長方形	3.5	3.1	10.85	2	中央部							
YT-18	楕円方形	3.9	3.8	14.82	4	北寄り							
YT-19	楕円方形	3.7	3.4	12.58	4	中央部							
YT-20	楕円長方形	5.5	4.4	24.2	4	中央部							
YT-21					4	中央部							

第3表 周辺弥生時代後期住居跡規模比較表



第29図 本村遺跡と殿山遺跡周辺図

- 君島利行 1995 『明城遺跡』壬生町教育委員会
 小玉秀成 2007 『塔ヶ塚古墳群の弥生土器』『小美玉市史料館報』第1号 小美玉市史料館
 日本窯業史研究所 1992 『栃木県上三川町 上ノ原・向原南遺跡』
 上三川町教育委員会 1995 『栃木県上三川町 巖山遺跡Ⅰ』
 堀静夫 1979 『第3節弥生時代』『宇都宮市史』第1巻原始古代編
 橋本澄朗 1984 『三 柳久保遺跡』『真岡市史』第一巻 真岡市史編さん委員会
 橋本澄朗 1987 『第三節農耕の発達と柳久保のムラ』『真岡市史』第六巻 真岡市史編さん委員会
 藤田典夫 2000 『栃木県における弥生後期の土器編年』『東日本弥生時代後期の土器編年(第2分冊)』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館

(注1)

本文で使用した図描きによる横位の直線文については、この他に横走文や横線文等の呼び方がある。

(注2)

SI03とSI06に十王台式の可能性のある土器片がみられるが、小破片であり、特定ができない。十王台式土器であれば、両遺構は若干後出する可能性もある。

(注3)

上ノ原遺跡は10軒確認されているが、土器の様相から十王台式土器が伴う時期と伴わない時期に分けることができ、2時期と考えられる。特に住居跡が隅丸方形のものは十王台式土器や燃糸を施文する土器を含んでいることから、後出的と考えられる。

(2) 古墳について

今回の調査で2基の古墳を確認した。1号墳(SZ1)は一辺が約19mの方墳で、2号墳(SZ2)は直径23mの円墳である。両者の規模はほとんど同じであるが、墳形の違いをみせる。主体部の形態も近似するが、攪乱が激しく側壁や奥壁等が一切残っていないことから、詳細な検討はできないが、北西約500mのところに位置する針ヶ谷新田古墳群と比較して若干の検討を試みる。なお、本遺跡の古墳については針ヶ谷新田古墳群と区別するため以下SZ1とSZ2の名称を使用する。

針ヶ谷新田古墳群は新田小学校建設に先立ち調査が行われ4基の古墳が確認されている。そのうちの1号墳と3号墳の調査が行われている。両方とも本遺跡の古墳と同様に天井石や側壁などが抜かれており、石室の全体像がわからないが、その形態的特徴を示すと次のとおりとなる。

1号墳の玄室平面形は、側壁に膨張を有し、奥壁が巨石一枚石になる形態で、側壁が凝灰岩の切石で少なくとも数段にわたって切組積みにされ、床面には川原石が敷かれていたと考えられている。また、羨道部は川原石の小口積みである。

3号墳の玄室平面形は、側壁が直線的で奥壁が半円形状に張出す形で、石材は奥壁が凝灰岩の1枚石で、側壁が凝灰岩の切石積みである。羨道部は川原石と凝灰岩割石の小口積みである。

第4表は針ヶ谷新田古墳群との本遺跡古墳との規模等を比較したものである。両者を比較してみると、古墳の墳丘規模は本遺跡古墳の方がやや大きいのが、石室の大きさはほぼ同規模であることがわかる。石室の形態もSZ1やSZ2の根石の状況から3号墳のような奥壁が半円形状に張出す形であったと想定される。また、SZ2の周溝上層から出土した凝灰岩片やSZ1の周辺に

散在していた凝灰岩片等から、側壁は凝灰岩の切石積みであったと想定される。小森哲也氏は、このような胴張りをもち最大幅が奥壁幅を上回り、側壁に小ブロック状の石材を用いるものをIV類Bとし、7世紀前半頃の時期に位置付けている（小森1990）。

副葬品はSZ2の周溝内から出土した直刀片が石室内の副葬品であったと考えられるが、それ以外は見つからなかった。なお、地域住民の話では、この辺の古墳から金環（金銅製耳環のことか？）が出土したとの情報もあり、盗掘などにより副葬品が持ち出された可能性もある。

SZ1の周溝内上層からは、土師器環、須恵器甕、高台付環、壺片が出土している。高台付環は南側周溝上層から出土し、8世紀代のものであることから、その後の墓前祭などで使用したものと思われる。

よって、遺物から年代を決めることはできないが、針ヶ谷新田古墳群との石室の類似性からSZ1及びSZ2は7世紀前半代の終末期古墳と考えられる。

最後に、第5表は泉内の終末期方墳を集成したものである。何れも盗掘などにより、不明な部分が多いが、7世紀前半もしくは中葉の年代に位置付けられている。

多功大塚山古墳と多功南原1号墳は単独で存在し、成願寺遺跡では、SZ100が単独で存在し、埋没谷を挟んでSZ105が円墳群内に存在する。特に注目されるのは円墳SZ106とSZ105が重複しており、報告者はSZ106（円墳）→SZ105（方墳）の変遷を考えている。顔朝塚古墳群については未報告のものであることから詳細は不明であるが、円墳群中方墳が1基確認されている。

資料が少ないため予測であるが、古墳時代最終末期に円墳から方墳への転換が図られ、それを最後に古墳が造られなくなる地域もしくは古墳群があり、その1つとして針ヶ谷新田古墳群を含む本遺跡を挙げることができるのではないだろうか。

（参考文献）

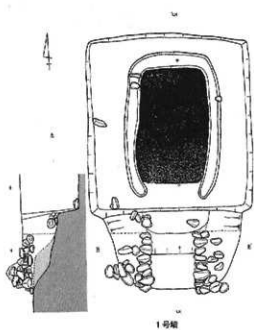
- 宇都宮市教育委員会 1983『針ヶ谷新田古墳群』
宇都宮市教育委員会 2009『みずほの台遺跡群Ⅲ』
上三川町教育委員会 1994『上神主浅間神社古墳・多功大塚山古墳』
小森哲也 1990『下野における凝灰岩切石使用の横穴式石室』『古墳文化の終焉』栃木県教育委員会
栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団 1999『多功南原遺跡』
栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団 2000『成願寺遺跡』
宅間清公 2012『顔朝塚古墳群』『平成23年度栃木県考古学会』資料 栃木県考古学会

古墳名	墳形	墳丘規模 (m)	石室の平面形	石室の平面規模 (m)						年代
				全長	実室		室門幅	羨道		
					長さ	幅		長さ	幅	
針ヶ谷新田古墳群										
1号墳	円墳	15	岡地部 削 取	3.58	1.84	0.82 ~ 1.13	1.6前後	1.3	0.7	7世紀前半
3号墳	円墳	12	岡地部 削 取	3.54	2.7	0.39 ~ 1.13	2.3前後	0.54	0.68	7世紀前半
針ヶ谷新田遺跡										
1号墳 (SZ1)	方墳	19		(3.6)	(2.4)	(1.25)		0.9	0.8	
2号墳 (SZ2)	円墳	23			(2.8)	(0.8 ~ 1.3)				

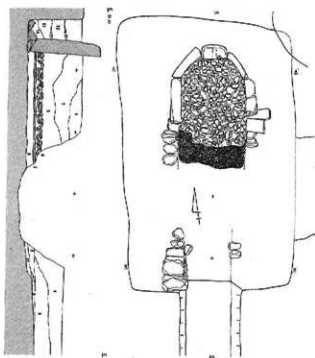
第4表 針ヶ谷新田古墳群と針ヶ谷新田遺跡出土石室比較表

No.	古墳名	所在地	墳丘規模 (m)	形状	主体部				出土遺物	年代	
					全長	規模 (m)		羨道			
						長さ	幅				長さ
1	城頭寺 S Z 100	宇部宮市西瀬部	13.7	川原石小口竪み 地盤形横穴式石室		3.7	1.3 ~ 1.5		ガラス小玉51	7世紀前半	
2	城頭寺 S Z 105	宇部宮市西瀬部	17.4×16.4	川原石小口竪み 地盤形横穴式石室		4.1	0.7 ~ 1.2		銅器漆器類、金銅鏡耳環1	7世紀前半	
3	笹木西台4号墳	宇部宮市西瀬部	13×12	川原石小口竪み 地盤・埴輪形横穴式石室	6.3	4.9	2.1 ~ 2.6	1.4	1.3	土師器杯、須恵器鏡	
4	針ヶ谷新田SZ1	宇部宮市針ヶ谷町	19	横穴式石室	(3.6)	(2.4)	(1.25)	0.9	0.8	土師器杯、須恵器長頸瓶、高台付杯	
5	多功大塚山古墳	上三川町多功	53.8	横石切扉前石室				1.8		土師器杯、須恵器長頸瓶、鉄釘	7世紀中葉
6	多功南塚1号墳	上三川町多功	24	横石造横穴式石室		2.4	1.8			土師器杯、須恵器長頸瓶、高台付杯	
7	新瀬塚13号墳	市貝町市瀬	18	横穴式石室						須恵器杯、蓋	
8	5内6号墳	小山市南宮	35.2×32.6	不明							

第5表 県内の古墳終末期方墳一覧表

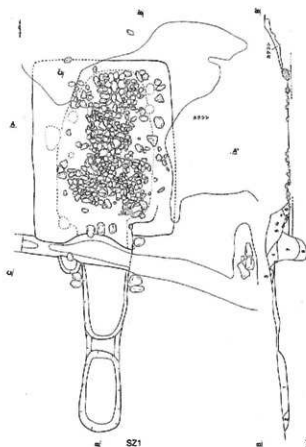


1号墳



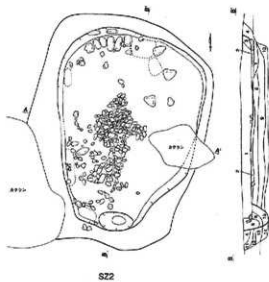
3号墳

針ヶ谷新田古墳群



SZ1

針ヶ谷新田遺跡



SZ2

第30図 針ヶ谷新田古墳群と針ヶ谷新田遺跡石室集成図

写 真 图 版



S101完掘状況（南から）

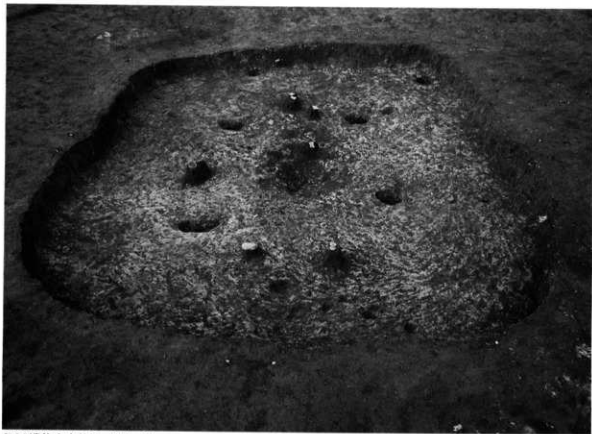


S101セクション（南から）

PL2



SIO2完器状況（南から）



SIO3遺物出土状況（南から）



S103セクション (南から)



S103遺物出土状況 (東から)

PL4



SI03・SI02完掘写真(西から)



SI04完掘状況(南から)



S104 (B区) 遺物出土状況 (東から)



S104 (D区) 遺物出土状況 (西から)



SI05発掘状況（南から）



SI05・SI04・2号墳発掘写真（西から）



SI06発掘状況（南から）



SI06（D区）遺物出土状況（北から）



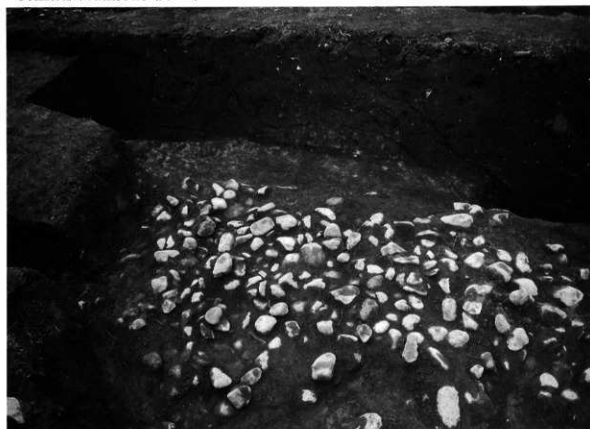
SIO6戸周辺遺物出土状況（南から）



1号墳主体部完掘状況（南から）



1号墳主体部床石確認状況（西から）



1号墳主体部セクション（東から）



1号墳主体部セクション（東から）



1号墳周溝セクション（東から）



1号墳周溝セクション (南から)



1号墳全景 (西から)



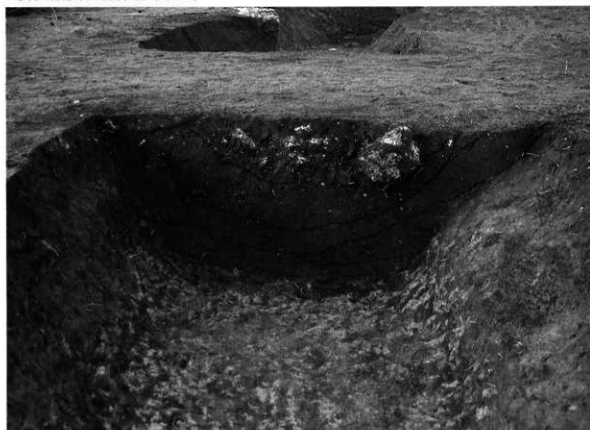
1号墳全景（南から）



2号墳主体部発掘状況（南から）



2号墳主体部床石確認状況（西から）



2号墳周溝セクション（東から）

PL14



2号墳周溝セクション（東から）



2号墳周溝南側遺物出土状況（南から）



2号墳全景（西から）



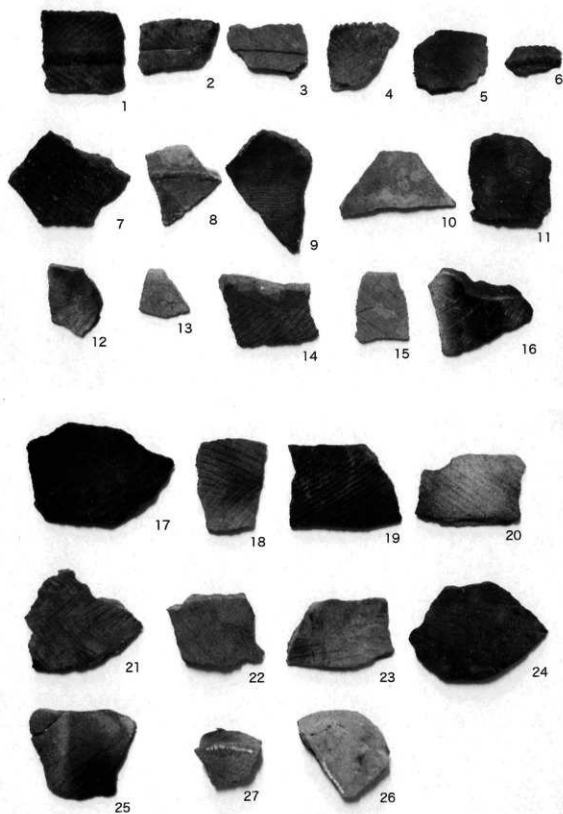
2号墳全景（南から）



SK01完掘状況（南から）



SK02セクション（南から）



①SI01出土遺物



①SI01紡錘車

28



②SI01石鏃

29



1



2



3



4



5

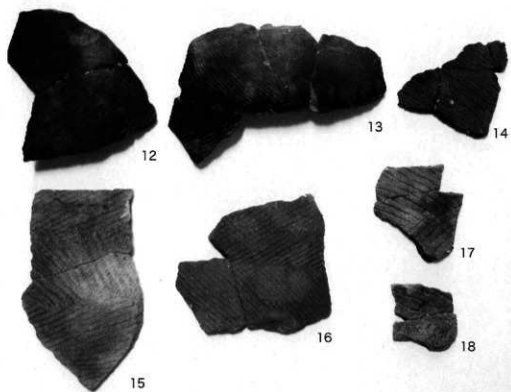
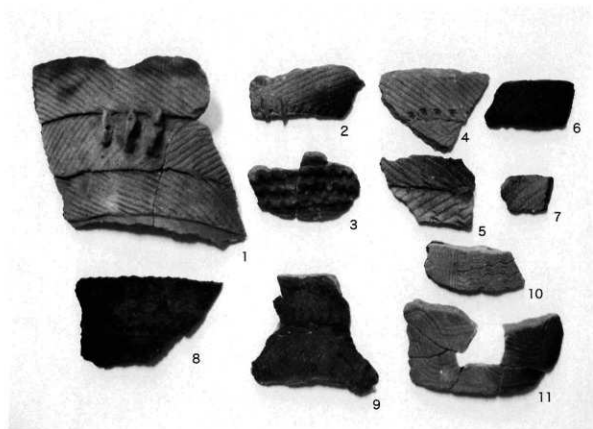


6



7

③SI02出土遺物





19



21



20



23

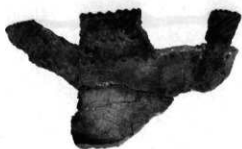


22

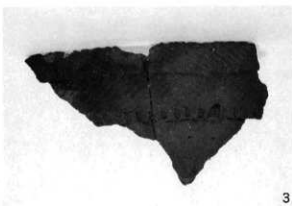
①SI03出土遺物(2)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



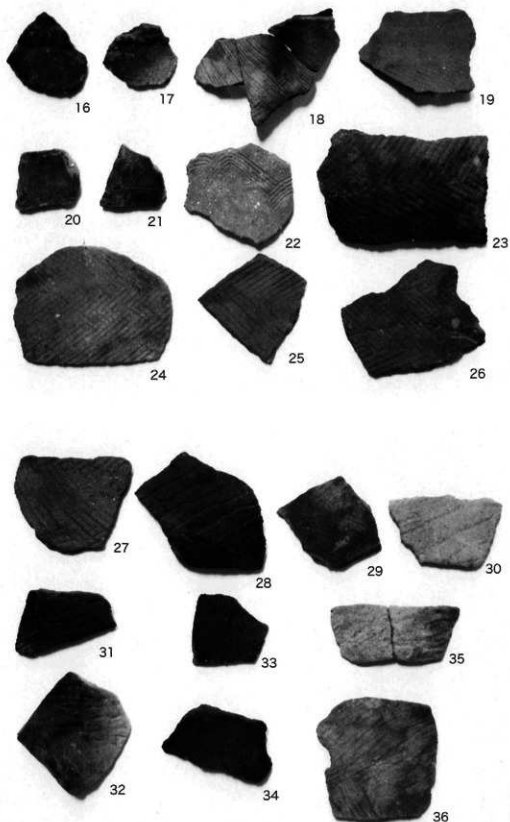
13



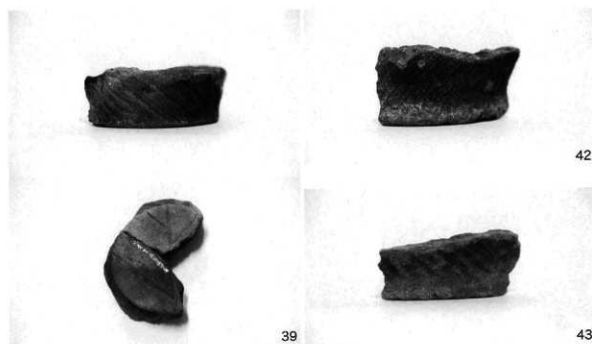
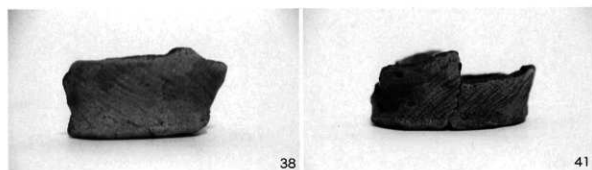
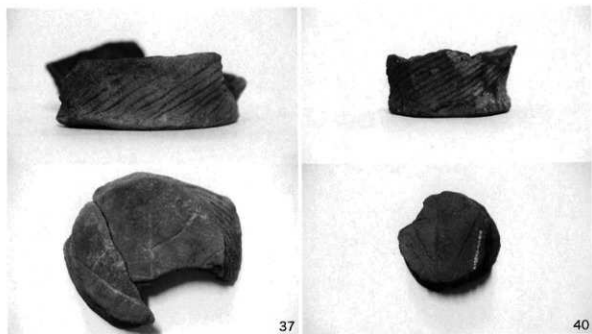
14



15



①S104出土遺物 (2)





44



45



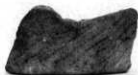
46



47



48



49



50

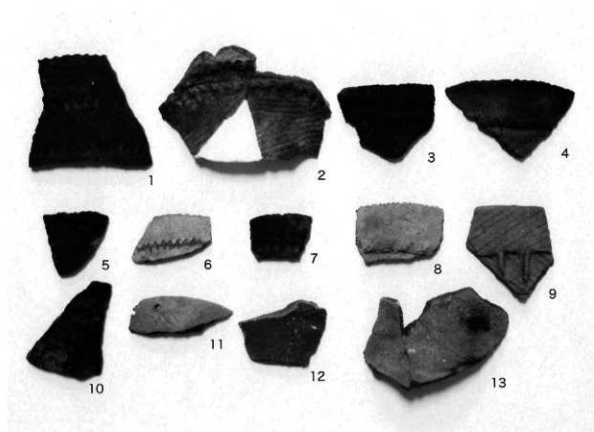


51

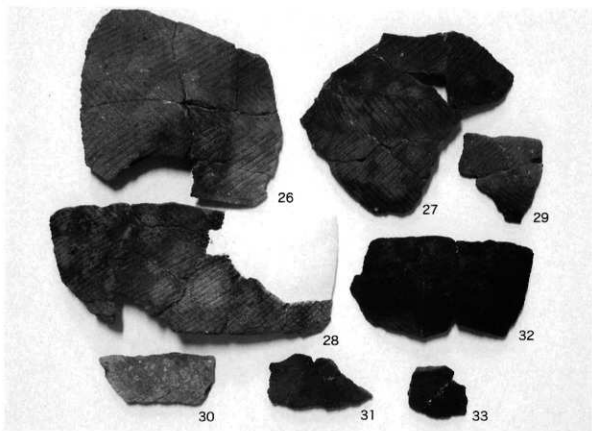
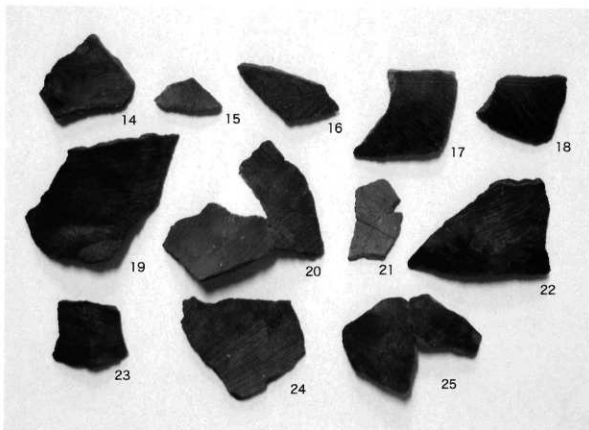
①SI04出土遺物 (5)



52



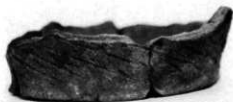
②SI05出土遺物 (1)



①SI05出土遺物 (2)



34



36



38

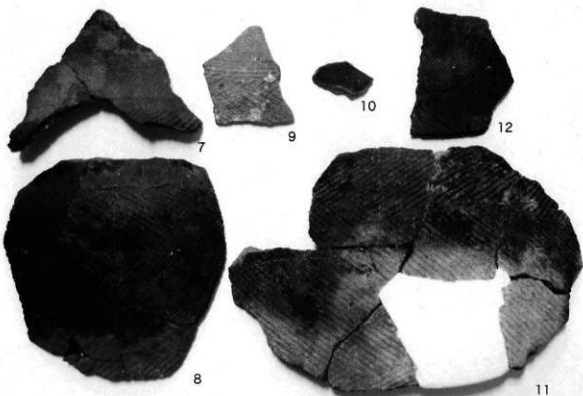
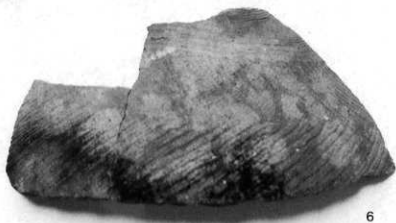


37

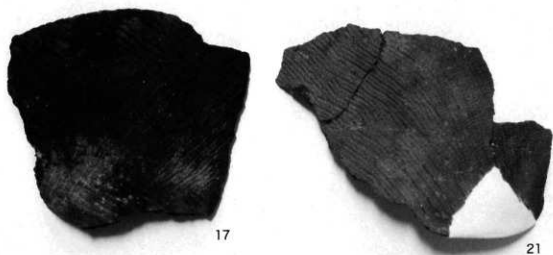
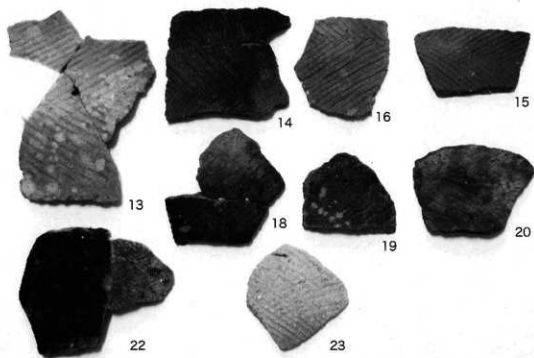


39

①SI05出土遺物(3)



①S106出土遺物 (1)





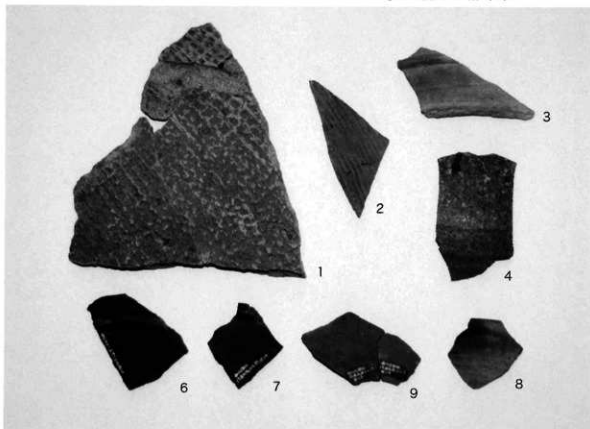
①SI06出土石器

27



5

②1号墳出土土器 (1)

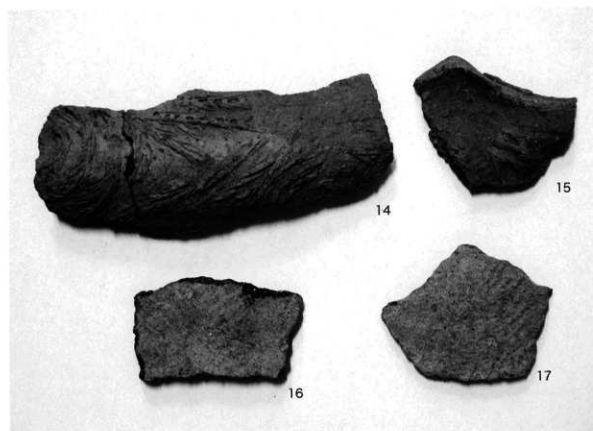
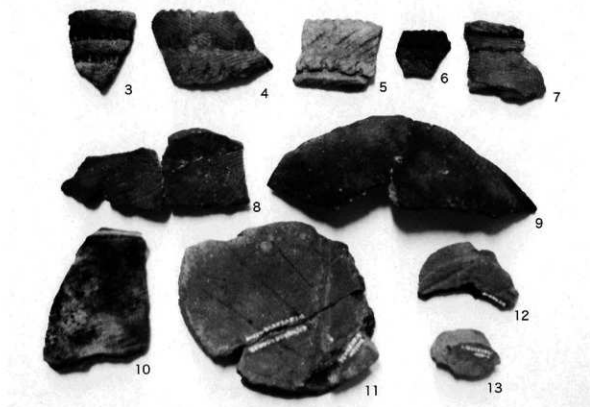


③1号墳出土土器 (2)

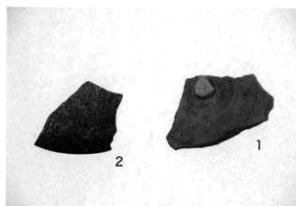
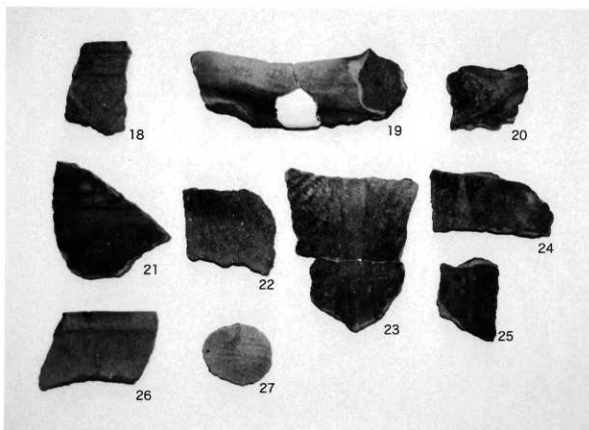


④2号墳出土直刀

1



①その他の出土遺物 (1)



①その他の出土遺物(2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	はりがやしんでんいせき
書名	針ヶ谷新田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第80集
編著者名	近藤真・今平利幸
編集機関	宇都宮市教育委員会
所在地	宇都宮市旭1丁目1番5号 Tm028-632-2764
発行年月日	西暦 2013年(平成25年) 5月31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
針ヶ谷新田遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	09201		36度 29分 30秒	139度 51分 26秒	20121015 ～ 20121115	約3,500	住宅地造成に先立つ調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
針ヶ谷新田遺跡	集落跡	弥生 古墳	竪穴住居跡6軒 円墳1基、方墳1基	弥生土器、石鏃、 紡錘車等 直刀	

遺跡名については、下野考古学研究会の踏査により「NEC工場地内遺跡」と報告されているが（下野考古学研究会 1996）、本調査時においてすでに NEC 工場はなく、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていなかったことから、栃木県教育委員会と協議のうえ、小字名を採用し「針ヶ谷新田遺跡」とした。

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第80集

針ヶ谷新田遺跡

発行 宇都宮市教育委員会
編集 宇都宮市教育委員会
宇都宮市旭1丁目1番5号
TEL. 028-632-2764
発行日 平成25年5月31日発行
印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
